

根 来 寺 坊 院 跡

昭和56年度

和歌山県教育委員会

序

戦国の世に重大な影響力を持ったとされる根来寺は、「まほろしの根来寺」と言われるようにその実態は不明な点が多く、ルイス・フロイスの本国への書簡や周辺に残る数少ない古文書にわずかにその姿を垣間見せるにすぎません。

昭和51年度から54年度にかけて実施しました広域営農団地農道整備事業関連の発掘調査は、根来寺の、ひいては県下における中世遺跡の調査に一つの画期をもたらす結果になりました。

根来寺における土塁や矢倉、堀の存在、あるいは山外に展開する町屋の発見は、単に一寺院の発掘調査というだけではなく、中世社会と大きく係わる存在としての根来寺を発掘を通して意識させるのに十分でした。その間に全国的にも中世遺跡の考古学的方法による調査の有効性の認識が進み、現在中世考古学としてその方法論が確立しつつあります。

県下には根来寺をはじめ高野山、熊野三山あるいは粉河寺など全国的にも有数な中世遺跡が数多く存在します。本県教育委員会では新たな視点でこれら遺跡の保存と活用を図るべく努力を重ねて行く所存であります。

関係各位や研究者の方々の熱意でスタートいたしました第1次10ヵ年の調査計画も本年度で第2年次を迎え、ここに昭和56年度の発掘調査報告書を上梓いたします。本書が今後の中世史ならびに中世考古学研究の一助となれば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書刊行に際して御教示、御協力いただいた各位ならびに研究者の方々に心より感謝申し上げます。

昭和57年3月31日

和歌山県教育委員会

教育長 高橋 正司

調査組織

調査委員会

調査委員

羽 磨 正 信 (県文化財保護審議会委員)

巽 三 郎 (#)

都出比呂志 (#)

藤澤 一 夫 (#)

調査員

上 田 秀 夫 (県文化財課技師)

事務局

理 事

山 田 実 (県文化財課課長)

局 長

海 野 正 幸 (和歌山県文化財研究会事務局長)

次 長

梅 村 善 行 (県文化財課課長補佐)

幹 事

桃 野 真 晃 (県文化財課第2係係長)

主任技術員

辻 林 浩 (県文化財課主査)

書 記

森 本 一 臣 (県文化財課主事)

例 言

1. 本書は国庫補助事業、昭和56年度根来寺坊院跡発掘調査の概報である。
2. 発掘調査は社団法人和歌山県文化財研究会に委託して実施された。
3. 遺構の写真撮影は楓裕史、上田が、実測は楓裕史、大岡康之、川端美樹、井馬好英、上田が
あたった
4. 遺物の写真は楓裕史、上田が撮影し、実測は楓裕史、大岡康之、中村憲代、味村万喜子、上
田が分担した。本書は上田が作成した。
5. 付表2の作成には中村憲代女史をわずらわせた。なお、付表の個体数には近世のものを含ま
ない。
6. 本書の遺物実測図と遺物写真に付した番号は一致する。

- 図23. C区遺構(247~266), SK1001-SK1003-SK1008
SK1024-SD1004-SG01
- 図24. C区遺構(267~289), SG01-SB1001-SD1003
- 図25. C区遺構(290~294), SD1003-SE01
- 図26. C区遺構(295~298), SE01
- 図27. C区遺構(299~301), SE01
- 図28. C区遺構(302~317), SE01-SX1001
- 図29. C区遺構(318~338), SX1001
- 図30. C区遺構(339~359), SX1001-P1006
- 図31. A区表土層、床土(360~365)
- A区遺構(363~366), SG01-SF01
- C区第1層(367~370)
- C区第2層(371)
- 図32. C区第2層(372~376)
- C区第3層(377~379)
- C区遺構(380), SX1001
- 図33. 出土銭貨拓影

図版目次

- 図版1. 調査地区(NG82)空撮
- 図版2. 1 調査地区全景 (西から)
2 A区全景 (南から)
- 図版3. 1 A区全景 (東から)
2 A区SD1003上層 (東から)
- 図版4. 1 A区SD1003 (東から)
2 A区SD1003 (西から)
- 図版5. 1 A区SD1003 (北から)
2 A区SF01 (北から)
- 図版6. 1 A区SB01 (南から)
2 A区SB01 (東から)
- 図版7. 1 A区SE03 (南から)
2 A区SE04 (南から)
- 図版8. 1 C区全景 (東から)
2 C区全景 (西から)
- 図版9. 1 C区SD1003 (東から)
2 C区SD1003 (北から)
- 図版10. 1 C区SB1002-SX1001(北から)
2 C区SB1002 (東から)
- 図版11. 1 C区SX1001 (南から)
2 C区SX1001 (東から)
- 図版12. 1 C区SX1001土層 (東から)
2 C区SK1001 (北から)
- 図版13. 1 C区SD1005 (北から)
2 C区SD1004-SB1001(南から)
- 図版14. 1 C区SD1004 (南から)
2 C区SD1004細部 (北から)
- 図版15. 1 C区SE01 (西から)
2 C区P1006 (南から)
- 図版16. A区表土、床土 (1~11)
A区第1層 (28, 29)
- 図版17. A区第1層 (12~22)
- 図版18. A区第1層 (23~27, 30~35)
- 図版19. A区第1層 (36~41, 44~46)
- 図版20. A区第1層 (47~54)
- 図版21. A区第1層 (55~58)
A区第2層 (59~60)
- 図版22. A区第2層 (61~72)

図版23, A区第2層 (73~85)	図版41, C区第3層 (234~237)
図版24, A区第3層 (86~91)	C区遺構・SK1001 (238)
A区第4層 (95)	図版42, C区遺構・SK1001 (239~246)
A区遺構・SK04 (93), SK09 (94・95)	図版43, C区遺構・SK1001 (254), SK1003 (225~
図版25, A区遺構・SK14 (96・97), SK17 (97	257), SK1008 (260~262)
98), SK16 (100), SK19	図版44, C区遺構・SK1024 (263), SD1004 (264)
(101~103)	SG01 (265~268)
図版26, A区遺構・SD09 (104), SD02 (105~112)	図版45, C区遺構・SB1001 (269~272)
図版27, A区遺構・SD02 (113~120), SK22 (121~122)	図版46, C区遺構・SB1001 (273~276)
図版28, A区遺構・SK30 (123), SD10 (124~125)	図版47, C区遺構・SB1001 (277, 278), SD1003 (281)
SD11 (126~127)	図版48, C区遺構・SD1003 (280, 282~290)
図版29, A区遺構・SG02 (128~135, 150, 151)	図版49, C区遺構・SE01 (291~298)
図版30, A区遺構・SG02 (136~143)	図版50, C区遺構・SE01 (299~301)
図版31, A区遺構・SG02 (144~149)	SX1001 (302~304)
図版32, A区遺構・SG02 (152~154), SE03 (155)	図版51, C区遺構・SX1001 (305~315)
桶ビット (156~161)	図版52, C区遺構・SX1001 (316~323)
図版33, C区表土、床土 (162~164)	図版53, C区遺構・SX1001 (324~329, 331, 332)
C区第1層 (165~167, 170~173)	図版54, C区遺構・SX1001 (330, 333~341)
図版34, C区第1層 (168, 169, 174~182)	図版55, C区遺構・SX1001 (342~353)
図版35, C区第1層 (183~187)	図版56, C区遺構・P1006 (354~359)
C区第2層 (188~192, 197)	A区表土、床土 (360~362)
図版36, C区第2層 (193~196, 198~205)	図版57, A区遺構・SG02 (363~365)
図版37, C区第2層 (206~213, 222)	C区第1層 (367~370)
図版38, C区第2層 (214~219)	C区第2層 (371~376)
図版39, C区第2層 (220~221)	C区第3層 (377~379)
C区第3層 (223~228)	C区遺構・SX1001 (380, 381)
図版40, C区第3層 (229~233)	

付表目次

付表1 出土銭貨一覧表

付表2 出土陶磁器組成表 (近世陶磁を除く)

I・調査

56年度に発掘調査の行なわれた地区は寺域の中心をなす平地部の東端に近い、開山の地円明寺から東へ約600メートルに位置する(図3)。

西流する菩提川と和泉山脈から派生する根来寺の後山である北山とに挟まれた巾約30メートル長さ約300メートルの東西に細長い地域で、現在約10枚ほどの水田に分筆されているが、過っては塔頭が東西に立ち並んでいたことが予想される(図版2-1)。

この地域を発掘調査の対象として選んだ理由は、北と南が山と川とによって制され、ここに営まれる塔頭の立地が地形的に限定され、塔頭単位の発掘調査には絶好の地域と思われたためである。又、他の地域での発掘調査で判明しているように、この地域においても水田の区画は過っての塔頭の区画をかなり正確に踏襲しているであろうことも当然予測された。平地部における発掘調査は大規模農道関連の調査(昭和51年度~54年度)や民家の新築工事に伴ない、延べ面積約1万平方メートルに及ぶが、一単位の塔頭を完掘した例は末だない。

本年度の発掘調査は、この地区の水田の2区画を対象として実施された。この地区と、菩提川を挟んで、対岸の平坦地の南寄り昭和54年度に調査された大規模農道関連第Ⅹ地区(根来寺坊院跡発掘調査概報Ⅲ・1980)、更にその大規模農道を挟んで、前山北斜面には西から、昭和52年度に発掘調査をし、元染付など多量の中国陶磁を出土した第Ⅲ地区(同概報Ⅰ・1978)、庭園遺構や茶室と思われる四阿風の礎石建物跡を検出した第Ⅵ地区(同上)、更に地下7メートルに埋まり、全面を天正13年の焼土に覆われて遺構が検出された第Ⅳ地区(同概報Ⅱ・1979)と続く。

しかし、当然の如く考えられていた水田の区画と塔頭の区画についての関係は完全に予想に反した。すなわち、現在の水田の区画と過っての塔頭の区画にほとんど関連性がないことが判明した。その最大の理由は菩提川の流路の変更である。菩提川が現在に近い流路をとるに至るのは江戸時代以降のことと思われ、調査地区内に天正の兵火後、江戸時代の再建以前の約100年間の菩提川の旧河道が検出されている。



図1 遺跡の位置

II・遺構

発掘調査は中央に約5メートル巾の土置場を残して2枚の水田に亘る。西側の水田をA区とし、東側をC区とした。両区には相当の比高差があり、東側のC区が約1.5メートル高い。

低地にあるためかA区には江戸時代の遺構がよく残存しているが、C区においては江戸時代の遺構の大部分が削平されてすでに失われている(図4)。

両区の遺構は建物の方位を一にしていない。A区は江戸期、C区は室町期の遺構での比較であるが、通例の地区において、一区画の中での規模の拡張や縮小はあるものの、江戸期と室町期の建物の方位にはほとんど変化が認められない。おそらく、この地区では、当初考えられたように塔頭が東西に整然と並ぶのではなく、菩提川の河道に規制されて、各個の塔頭がまちまちの方向に向いていたものと思われる。又、建物の方位は両地区に斜めに貫通する大きい石組の溝の存在とも関係がある。この溝は室町時代から江戸時代の再興時を通して利用されたと考えられており、A区の塔頭はこの溝の西側、C区の塔頭は東側に、相対して斜め向いに営まれていると見こともできる。

1. A区の遺構

A区の遺構は大きくは3時期に分かれる。第1層、第2層、第3層の各層除去後に検出される

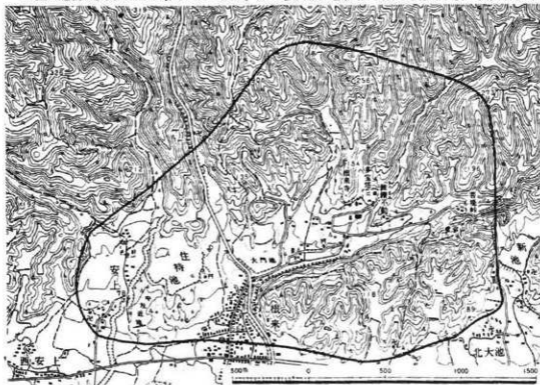


図2 遺跡の範囲

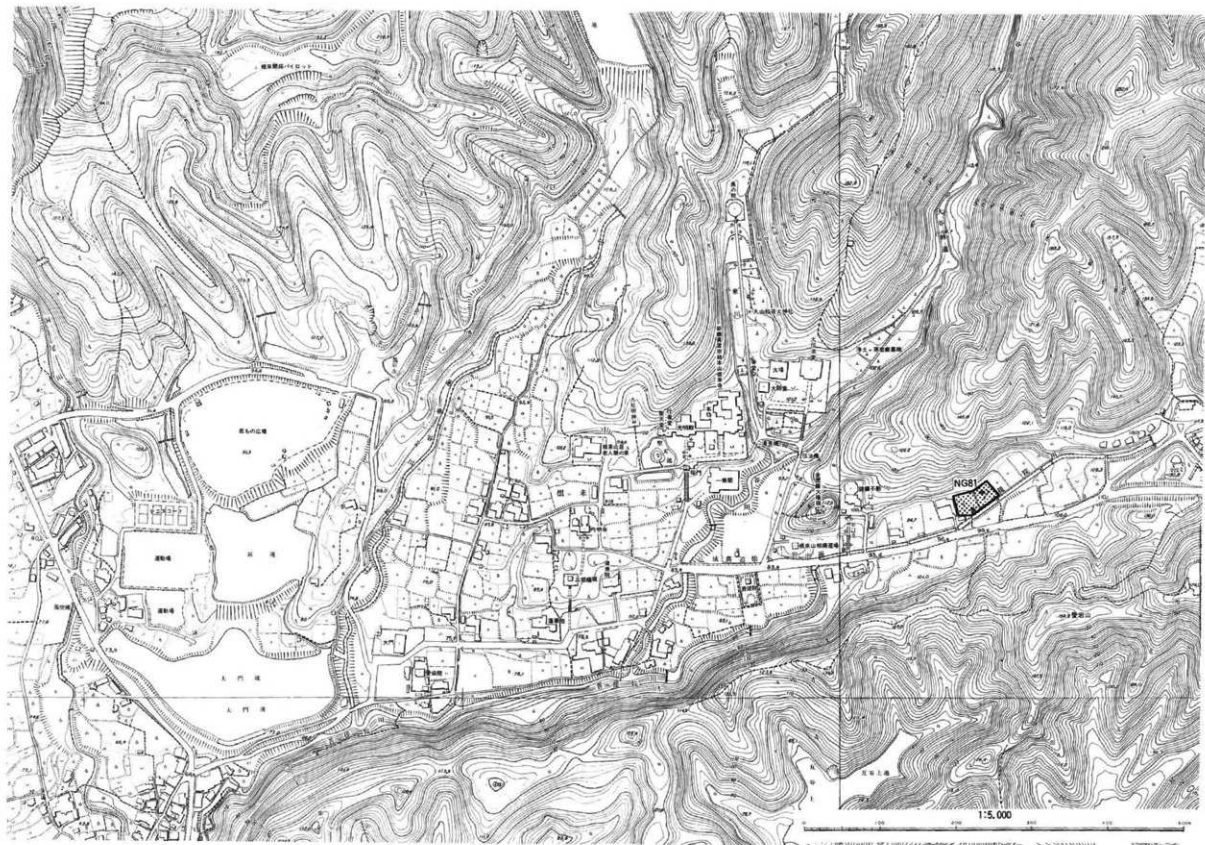


图3 山内地形图

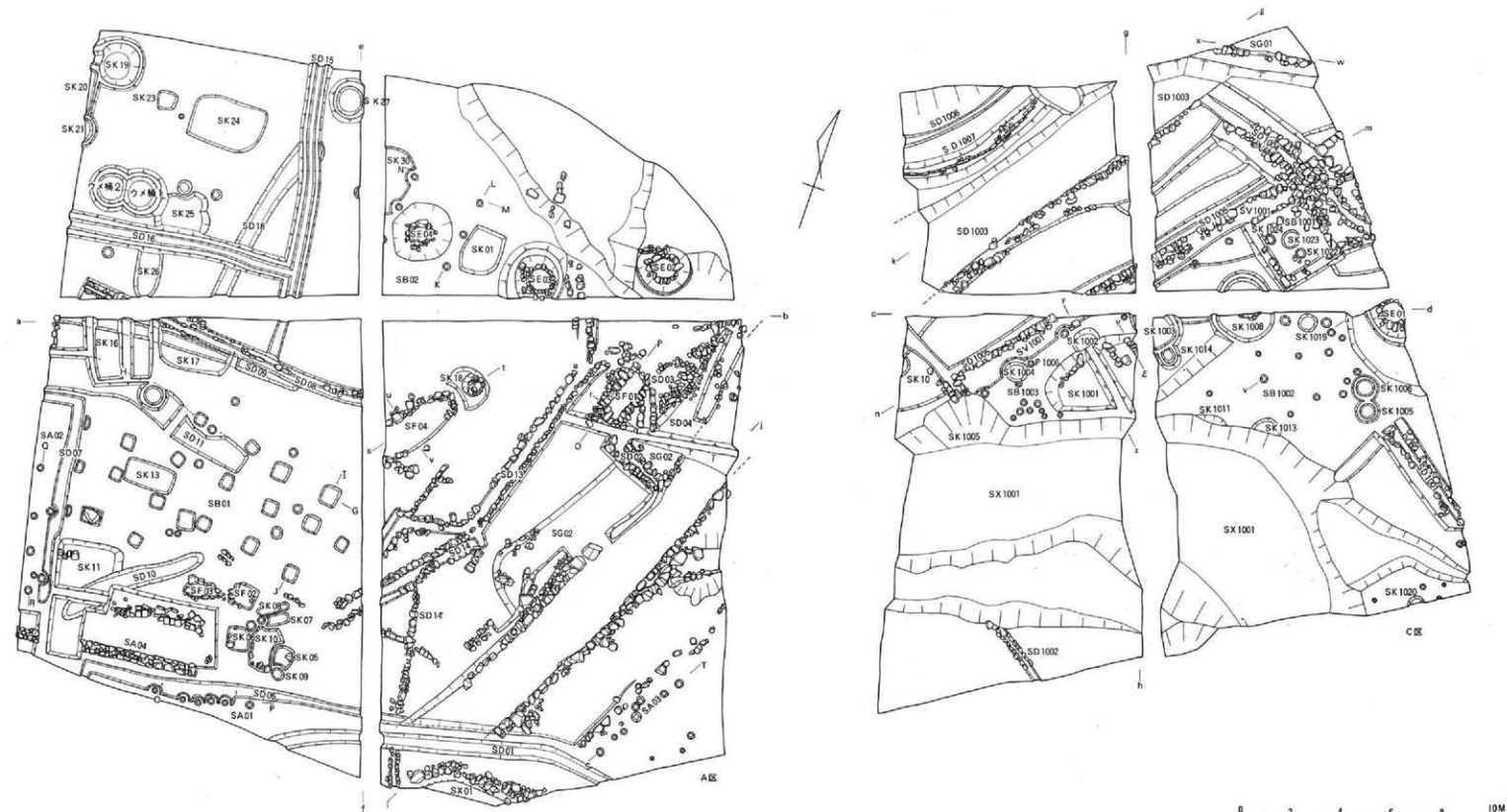


图4 遺構平面図

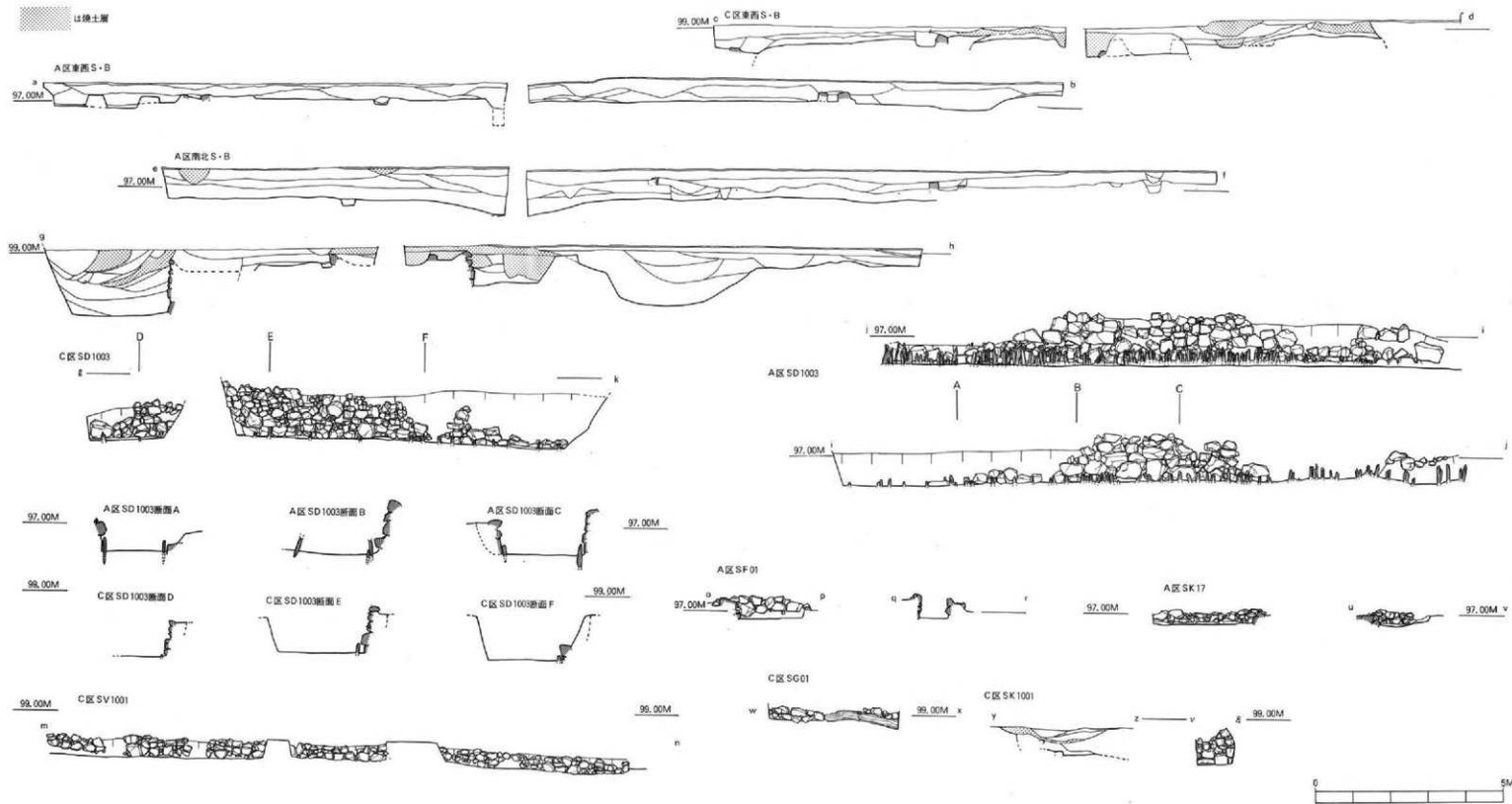


图5 土層构造横立面图

それぞれで、下層から第1期～第3期とする。第1期は天正の兵火以前の遺構、第2期・第3期は江戸期の遺構である。第3期の遺構の一部は床土を除去した段階ですでに検出され、そのため削平されているものもあり、余り残存状態は良くない。又、第1期の遺構は第2期の遺構に削平されて、良好には残存しない。最も残存状態の良好なのは第2期の遺構である。第2期の遺構は天正の兵火後の復興時の遺構で、17世紀後半以降のものと考えられる。

発掘調査はこの第2期の遺構を主対象として行なわれた。第3期の遺構は、第2期の遺構の調査にさしつかえのない範囲で残したが、一部やむをえずに記録の後破壊した。又、第1期の遺構については、第2期の遺構が粗な、北西隅のA4区においてのみ、第2期の遺構を残したままで調査し、他はサブトレンチによる包含層の検出にとどめた。なお、A4区における第1期の遺構は地山面で検出されたが、調査区南西A3区には第4層が認められ、この第4層を遺構面としている部分も存在すると考えられ、第4層下にA4区で検出された天正の兵火に懸る第1期より更に古い時期の遺構が存在する可能性も残る。

a. 第1期の遺構

A4区においてのみ調査を行なった。サブトレンチによると、南西隅のA3区においては第4層を遺構の切り込み面にするものと思われる。第2期の遺構が土盛りによらず、削平によって整地されているため遺構はきわめて浅く、残存状態は良くない。

第3層には近世の遺物が見られないが、第2層に中世の遺物が大量に見られるのは削平による整地のためと思われる。従って、第3層もプライマリーな包含層ではなく、一部は動かされているものと思われる。

焼土層は存在しないが、天正の兵火に懸る時期の遺構と考えられる。

SK23・24・25・26などの土壌やSD18などの溝が検出されている。又、A区南東に検出された石組排水溝SD1003はこの時期に造営されたものと思われる。

SD1003は第2期に至っても一部の石の積み直しをして再使用しているもので、全調査区を斜めに貫ぬく巾約3メートル、深さ1.2～1.5メートルの大きい溝である。石積は多数の杭によって補強されている。後述C区の自然流路SX1001が河道を変更する以前の排水溝と思われる。C区SD1003からの出土遺物により、16世紀後半の遺構と思われる。なお、根来寺における使用石材は庭園など特殊なものを除いてすべて和泉砂岩の割石である。

池状遺構SG02も兵火以前のものと思われる。第2層除去後にその輪郭を現わしたが、堆積した暗灰色粘土が上層に影響したためと思われる。出土遺物に近世のものが見られず、又、一部がSD1003に切られている。一辺14メートル以上、深さ約1メートルの池と思われるもので、護岸の施設等は見られないが、木葉などを含む有機質土が厚く堆積している。

b. 第2期の遺構

第2期は兵火後の再建時の遺構である。比較的良好に残存しており、特に南西のA3区において遺構が密である。

SB01は東西5間以上、南北3間の規模を持つ建物である。建物を構成する方形の土壌は浅く、柱穴ではなく礎石の抜き取り痕と考えられるものである。

SE04は上端径約60センチの小さい石組の井戸である。や、持ち送り風に人頭大の和泉破岩の割石を積み上げている。SB02はSE04の上屋と考えられる掘立柱の建物である。

桶ビット01・02は直径約1.2メートルの大きい桶を東西に2個並べた埋桶遺構である。根来寺では江戸時代以降通有に見られるが、兵火以前のはかって一例検出されているのみである（第X地区）。又、逆に兵火以前に通有に見られる埋壘遺構は江戸時代のものが知られていない。この種の遺構には様々な機能が考えられるが、中世から近世にかけて、壘から桶への用材の変化があるものと考えられる。

この面で検出された土壌にはSK05～22・30などがあり、溝にはSD06・07・09・10・15・16などがある。その他には、石組の溜槽SF01～04、櫓列と考えられるSA01～03などが検出されている。又、第1期に造営されたSD1003はこの時期においても再使用されたと考えられ、東側の石組には積み足しを行ったと思われる痕跡が見られる。根来寺において、この様な大規模な石組排水溝は初見である。幹線的な役割を持つ排水溝と思われる。根来寺に営まれた塔頭の周囲を巾30センチ前後、深さ20～30センチの小排水溝が巡ることは第III地区、第IV地区などで、すでに確認されており、又、各塔頭の小排水溝から巾60～70センチ、深さ70～80センチ程度の中排水溝とも言うべき石組の溝に集水されることも第III地区などで判明している。おそらく、これが更にSD1003のような大排水溝に集水され、最終的に自然流路に排水されていくものと思われる。なお、本年度調査地区のような大排水溝沿いの塔頭では、SD15やC区SD1005などの小排水溝から直接大排水溝に排水される構造になっているようである。

c. 第3期の遺構

第3期の遺構の遺存状態は余り良好とは言えない。土塀の基礎と思われる石垣や井戸を除いて遺存する遺構の大部分が石組の浅い排水溝である。大部分の溝がA区東半に集中し、いくつかの切り合いがある。完存するのは山側から川側に流れるSD02からSD05へと続く溝のみで、相互の前後関係は余り明らかではない。なお、この段階では前述SD1003はすでに埋められている（図版3-2）。SD01～05・14などが第3期のものである。

SE02・03は共に上端径約90センチの石組井戸である。人頭大の和泉砂岩の割石をや、持ち送り風に積み上げている。上屋等の施設は検出されていない。又、双方の井戸の前後関係や下限の時期も明らかではない。

2. C区の遺構

C区においても、A区同様に第1～第3期の遺構に分類できるが、第2・3期の遺構は余り残存していない。又、近世の遺構である第2・3期の遺構は、第1期の遺構をほとんど削平せず、土盛りによって営まれたため、兵火以前の遺構は良好に残存している。なお、根来寺における整地は削平による場合と土盛りによる場合が混在することがすでに知られている。

菩提川の旧河道と考えられる自然流路が検出されている。SX1001がそれで、兵火以前の遺構を切り、第1期と第2期の間の時期に属するものである。出土遺物に近世のものが見られないため、取りあえず、兵火から余り遠くない時期のものと考えて、仮にⅠ期とする。

a. 第1期の遺構

天正の兵火以前の遺構で、第3層除去後に検出される。一般の塔頭と考えられるもので、SD1003と同一の方位を取り、石垣SV1001と、それに伴う溝SD1005とによって区画がなされているものと思われる。掘立柱の建物SB1002、1003、焼土で埋まったSK1001などの土壌、溝SD1003や、それに注ぎ込むSD1004下層などで構成されている。しかし、この塔頭の大半が後述するSX1001によって切られているため、全体の構造や規模等は不明である。

SK1001は一辺約5メートル、深さ約1メートルの焼土の埋まった隅丸方形の土壌である。北と東の壁の一部に石組が残っている。

SV1001はこの塔頭の北側を囲むと思われる高さ約30センチメートルの石垣である。SD1003に沿ってC区西端近くで直角に折れ曲がる。

SD1003はA区に続くもので、巾約3メートル、深さ約1.5メートルの規模を持つ。遺構の南壁は石積で、A区同様に多数の杭で補強されている。北側は岩盤の露岩で、石積は行なわれていない。溝底から永禄12年（1570）銘の宝きよ印塔の台座が出土している。

P1006は直径約30センチメートルの柱穴である。SK1001、SX1001に切られている掘立柱建物SB1003に属するものと思われる。扁平な河原石を礎板状に柱穴内に置き、これを囲むように十数個の土師皿を置いている。地鎮の一種と考えられるものである。

b. 第Ⅰ期の遺構

確認されるのはSX1001のみである。自然流路と考えられるが、多量の遺物が出土するので、取りあえず遺構として扱う。

天正の兵火から17世紀後半の復興までの間の時期の菩提川の旧河道と考えられる。比高差が大きいいためA区では検出されていない。ごく短い期間の流路と思われる。

巾約8メートル、深さ約1.3メートルの規模で、砂利が埋まっている。第1期の遺構を孤立にえぐり取る流路を取っており、大量の遺物が出土する。遺物の時期は第1期のものと変わらない。

c. 第2・3期の遺構

近世の遺構である。兵火後の復興時のものと、それ以降のものがA区同様に存在すると思われるが、その区別は余り判然とし難い。又、耕作等による削平が大きく、遺構の残存状態は良好ではない。

石組によって方形の区画を持つ建物SB1001、石組井戸SE01、石組排水溝SD1001、SD1004上層、素掘りの溝SD1006、丸瓦を伏せた暗渠排水溝SD1007、直径20～25センチの丸太の上に石を積んで護岸した池状遺構SG01、土塙SK1008などがある。又、A区同様に、第2期にはSD1003を再使用しており、この事から考えると、SD1003と方位を一にするSB1001やSD1003に流れ込む小排水溝SD1004上層などが第2期に属するものと思われる。

SB1001は四隅に扁平なや、大きい石を置いた、東西2.4メートル、南北2.7メートルの建物である。北面と東西両面の一部に外に面を持った石を並べている。SK1022・1023はこれに伴うと考えられる土塙で、おそらく倉庫のようなものであろう。

SE01(図7)は径約1メートル、深さ約4メートルの石組の井戸である。石材は他の石組の遺構同様に和泉砂岩である。壁は第1期のそれのように持ち送らずほとんど垂直である。井戸の基底には大きい石を用いて安定させ、その上に小振りの石を積む構造になっている。又、中心部の岩盤は逆円錐形に掘り凹められており、割れて落ち込んでいたが、ここに緑泥片岩の扁平な板石を蓋状に置いていたようである。

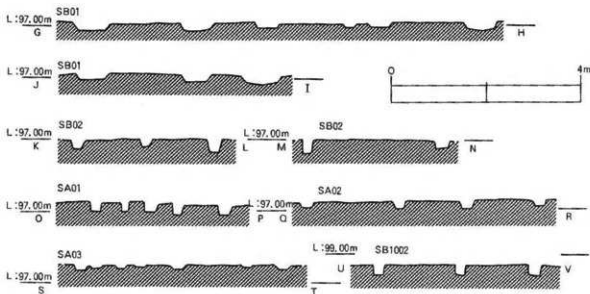
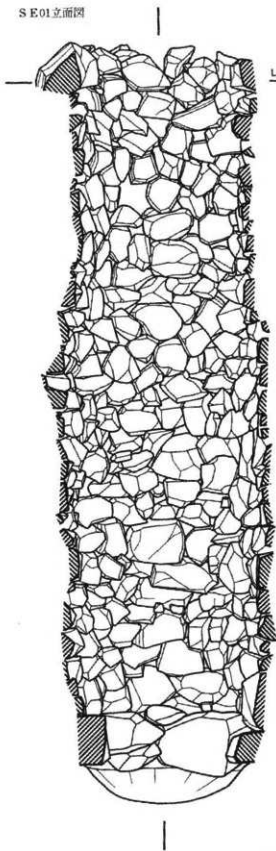


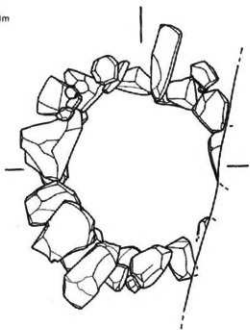
図6 SB・SAエレベーション

S E01立面图



L: 99.00m

S E01平面图



S E01基部部平面图

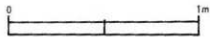
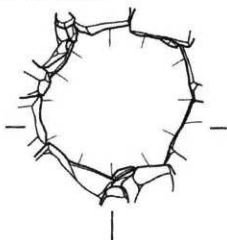


图7 SE01平面、立面图

III・遺物

1. A区包含層出土遺物(図8-1~図13-92、図31-360~362、図版16~24、図版56)

a. 表土及び床土出土遺物(1~11、360~362)

表土や床土にもかなりの量の遺物が出土している。他の地域からの混入ではなく、耕作等により、この地区の地下から上ったものと思われる。

中国製青磁(1)・白磁(2)・染付(3、4)、美濃瀬戸系天目茶碗(5、6)・灰釉皿(7、8)、備前焼壺(9)・甕(360~362)などの中世陶磁や、唐津焼皿(10)、伊万里染付碗(11)などがあり、おおよそ15世紀から18世紀までの遺物が見られる。

青磁碗(1)は体部外面に線描蓮弁文を持つものである。釉は透明感の強い、や・青味の感じられる草緑色を呈し、全体に細かい貫入が見られる。釉は高台畳付を越えて一部高台内面にまわるが畳付での釉の削り取りは行なわれていない。外底は露胎で、露胎部との境は茶褐色の発色が見られる。胎土はや・粗く、灰白色である。

白磁皿(2)は割高台などの見られる小振りのタイプのもので、精良な磁質で乳白色の胎土に透明感の高いや・青味のある釉がかかり、全体に細かい貫入が見られる。

染付皿(3)は内面見込に羯摩文、外面に牡丹唐草文を持つ端反りのものである。外底は無釉で、畳付の部分の釉は外から鋭角に面取りをするように削り取っている。火中する。

碗(4)は内面見込に菊花文を持ち、外底には「大明年造」と思われる青花銘が見られる。饅頭心型の底部を持ち、口縁部の内彎するものである。

備前焼壺(9)は暗赤褐色のや・粗い胎土で、肩部に櫛描の平行沈線と波状文が見られる。甕には扁平になった玉縁状の口縁を持つもの(360、361)から、兵火直前の、口縁外面に波状の段の付くもの(362)まで見られる。

唐津焼と思われる腰折の皿(10)は火中して釉が白濁した海綿状になっている。胎土は比較的精良で堅く、暗赤褐色を呈す。

b. 第1層出土遺物(12~58)

青磁(12~16)・白磁(17~21)・染付(22~27)・鉄釉系陶器(28、29)、美濃瀬戸系天目茶碗(30、31)・灰釉平碗(32)・灰釉瓶・灰釉盤、備前焼(33~41)、東播系須恵質片口(42、43)、土師質・瓦質土器(44、45)、土師質皿(46~52)、茶臼(58)や一石五輪塔、砥石、硯などの中世の遺物、伊万里染付(53、54)、丹波焼水屋甕(55)、京焼碗(57)、不明陶器(56)などの近世の遺物が出土する。

青磁

12は高台から直接体部が外方に抜くタイプの盤である。畳付の釉を削り取っており、露胎部と

の境は黒褐色を呈する。火中して釉は白濁している。13は体部内外面に平彫りによる蓮弁文を持つ盤で、口縁は桜花である。釉は草緑色で、胎土の灰味は強くない。高台部を欠くが、外底の釉を輪状に削り取るものと思われる。

14は全体に薄い造りの香炉で、や、青味のある白濁した釉がかかる。15は体部に算本文の見られる香炉で、暗緑色の釉が厚くかかる。

16は透明度の高い淡緑色の釉が比較的厚くかかる小碗である。外底は無釉であるが、一部釉が外底に流れ込み、露胎部との境は赤橙褐色に発色している。外底には輪陶杖痕が見られる。

白 磁

大部分が皿であるが、17は狛犬等の脚部と思われるものである。

18・19は共に純白で、光沢のある釉のかかる大形で、精良な造りの皿である。18の外底には「圃」の青花銘が見られる。20はやはり大形の皿で、釉は若干の青味を帯び、全体に細かい貫入が見られるが、精良な造りで、疊付の釉の削りも18・19同様に丁寧である。21は16世紀タイプと言われる通例の皿で、や、造りが雑である。釉は艶のない乳白色である。

染 付

皿、盤、坏、柄などが見られるが、柄は少量である。

22は荳筍底の皿で、内面に花鳥文、外面体部に蕉葉文、口縁付近に硬化した波濤文帯が見られるものである。胎土は粗く、ざっくりした感じで、黄白色を呈す。総釉で、疊付には珪砂状のもの付着が認められる。23は内面見込に玉取獅子文、外面体部に牡丹唐草文を持つ端反りの皿である。24は内面見込に比較的太い筆で一気に描かれた花文らしいものが見られる皿である。外面の文様は不明であるが、端反りの器形と思われる。25は口縁の内彎する器形の皿で、内面見込に蛟竜文の描かれるものである。内面体部にも一対の蛟竜文が見られる。外面体部は無文で、外底には「富貴佳器」の青花銘が認められる。

26は大形の盤で、呉須手と俗称されるものの一種である。通例、内面見込と内面体部に太い濃筆で大きい牡丹文が描かれる。呉須は黒味を帯び、発色は良くない。胎土は粗く軟質で、や、黄味を帯びる。断面台形の太い高台には砂が付着している。

27は薄く、精緻な造りの花鳥文の坏である。呉須の発色は良好で濃く、鮮やかである。

鉄釉系陶器

鉄釉系陶器には、黒釉・褐釉四耳壺や褐釉の茶入(28,29)などがある。28,29は共に肩衝形と思われるものである。胎土はや、セピア調の褐色で、きわめて緻密で精良である。体部下半は露胎である。内面には轆轤による引き上げ痕を残している。

備前焼

壺、甕、摺鉢、鉢などが見られる。

33・34は玉縁状の口縁を持つ大形の壺である。共に暗灰色のや、粗い胎土を持つ。33の口縁部は外傾し、34はわづかに内傾する。35は小形の壺で、セピア調の赤褐色で、比較的堅緻な胎土を持ち、肩部には襷描の波状文を有する。

36は器径に比して薄い器肉の、水屋裏に似た器形を持つものである。灰白色の粗い胎土である。

37はむしろ甕と呼ぶべき小形の壺で、蓋の付くものと思われる。

38～40の鉢は平底である。底部はいくつかの指頭痕を残したまゝ、末調整である。体部は一度外方に広き、口縁付近で内面に屈曲する、や、摺鉢に似た器形を持っている。内面の調整は内底中心に至るまで軸回転による横ナデである。外面も底部付近まで横ナデを施しているが、口縁付近を除いて余り丁寧ではなく、巻き上げ痕を残している。38及び40には口縁下に直接の重ね焼きの痕跡が見られる。41は鉢形形の器形を持つものである。内面及び外面体部は横ナデで調整し、外底には不定方向のナデが見られる。

須恵質土器

東播磨の片口である。42・43は共に胎土はや、粗く、暗灰色を呈す。口縁部は丁寧に横ナデを施しているが、口縁直下からの横ナデは粘土の巻き上げ痕を残して荒い。共に外面口縁直下に直接の重ね焼きの痕跡を残す。この種のもは、少量で、小片が多いが、山内の各地からコンスタントに出土する。

土師質・瓦質土器

土師質鍋、土師質こね鉢、瓦質火舎などがある。

44は砂粒や片岩粒を多く含む粗い暗茶褐色の胎土を持つ鍋である。内面から外面口縁部を経て、頸部直下まで横ナデで調整するが、外面胴部はへら削りのまゝである。

45は外面体部中に戴手文の陰刻を巡らせた瓦質の火舎で、簡単な三足が付せられる。内面は、内底を不定方向にナデした後、体部に横ナデを施し、水平に屈曲した口縁部には横方向の細いへら磨きを行っている。外面は体部を横ナデし、外底を不定方向にナデ、後に、口縁部を残し、体部を底部から口縁部方向に向かって縦方向の太いへら磨きを行っている。又、外底は中心部を残して外縁を約1.5センチの巾で、斜めにへらで浅い角度の面取りを行っている。

土師質皿

土師質皿には小皿(46～48)、中皿(49,50)、大皿(51,52)がある。小皿は径9センチ前後、中皿は10センチ前後、大皿は径11センチ前後である。

これらのほとんどが一般的な意味での中皿程度の法量であるが、このや、特殊な、地方色の濃い天正の焼土層から大量に出土する土師皿はすべて法量がこの辺りに集中するため、とりあえず以上のように分類しておく

この時期に近畿地方全般に見られるものに比して胎土はや、粗く、赤味が強い。又、特に小皿

において、器肉も厚い。

小皿は外底に指頭痕を残し、内底は不定方向にナデている。口縁部から体部にかけて強い横ナデを施すため、外面底部から体部にかけての強い屈曲と、口縁部の肥厚に特徴がある。大皿も同様の技法によるが、横ナデはむしろ内面に大きく力が加わり、そのため、体部の屈曲や口縁部の肥厚は大きくない。51、52には逆に口縁部がやゝ内彎する感じが強い。中皿はこの中間的器形を持つ。

これらは、紀ノ川中流域でよく見られるタイプで、他の地域ではほとんど見られない。又、根来寺において天正13年の焼土層から出土する土師質皿の大半がこのタイプである。以下に「根来寺に通有の」という表現を用いるものはこれを指す。

近世陶磁

伊万里磁器、丹波焼、京焼などが出土している。

53は中央部につまみの付く染付の蓋で、外面に蕪の文様が描かれている。細筆によって輪郭を描き、内を濃筆でつぶす。呉須の色は明るく、発色は良好である。54は外面に草花文の描かれる、いわゆるくらわんか手の染付の椀である、呉須の色は灰黒色で、発色は不良である。

55は丹波焼の水甕である。水平に肥厚した口縁部には三条の凹線が巡る。胎土は比較的堅緻な灰白色であるが、泥漿により表面は赤茶褐色を呈する。内面及び外面口縁直下までは横ナデであるが外面体部は粗い刷毛状のもので軸轆回転により水平方向に調整している。

56は須恵器の坏蓋状の器形を持つ不明土器である。胎土は暗灰色で堅緻であるが、表面は泥漿により暗茶褐色を呈す。外面天井部はヘラ先によって巾5～6ミリ単位で軸轆回転によって削り、体部はヘラの腹によって回転で削っている。内面及び外面口縁部は横ナデで調整されている。外面体部に直接の重ね焼の痕跡を残している。

57は京焼の椀である。甕のある鉛釉がかかり、やゝ灰味のある枇杷色を呈す。総釉で、畳付の部分の釉は削り取っている。露胎部との境は赤橙色に発色する。全体に細かい貫入が見られる。

c. 第2層出土遺物 (59～85)

青磁 (59～62)・白磁 (63～66)・染付 (67,68)、美濃瀬戸系陶器 (69,70)、土師質甕 (71)、土師質皿 (72～78)、丹波焼 (79)、唐津焼 (80,81)、伊万里染付 (82,83)、砥石 (84,85) などが出土している。

青磁

青磁の大部分が椀で、少量の皿や盤などが見られる。

59は線描蓮弁文の椀である。内面には印花文とヘラ先による劃花文が見られる。胎土は灰白色で釉は薄く、やゝ青味のある草緑色である。総釉で、外底の釉を輪状に削り取っている。露胎部との境は赤橙色を呈す。60はやゝ腰の張った器形を持つ線描蓮弁文の椀である。剣頭は蓮弁の單

位をほとんど意識せず付せられている。胎土は暗灰色で、暗緑色の釉が薄くかかる。釉は高台外面途中までかかるが、一部畳付にまわり、これを釉に削り取っている。外底は無釉である。61は比較的シャープな造りの端反りの椀である。暗灰色の堅緻な胎土にや、くすんだ草緑色の釉が薄くかかる。

62は器形が不明である。脚の付く器形とも考えられるし、又、実測図上面端部が無釉であることから、実測図の上下が逆の可能性もある。火中するが、灰白色の胎土は堅緻で、釉は厚く、明るい草緑色を呈す。内面は無釉である。

白 磁

白磁は通例の端反りの皿が主体であるが少量の梅瓶や坏なども見られる。

63は青白磁の梅瓶である。灰白色の胎土にわずかに灰味のある釉が薄くかかる。

64は八角坏である。高台は四分分割の割高台である。ざっくりした感じの乳白色の粗い胎土に艶のある透明感の強い釉がかかる。体部下半は露胎である。

65は腰部で強く屈曲する器形を持つ坏である。火中して釉は光沢を失ない、や、灰味が強い。全体に細かい貫入が見られる。余り類例の見られないものであるが、比較的高い高台を持ち総釉で、畳付の部分の釉を削り取るものである。

66は内面体部に唐草文と思われる型押の浮文を持つ小椀である。釉はや、青味を帯びて光沢がある。胎土は薄く、端部はシャープである。

染 付

染付には椀、皿、盤などがあるが、皿が圧倒的に多数を占める。

67は外面体部に雑なタッチの牡丹唐草文の描かれる端反りの皿である。呉須は黒ずんだ発色をしている。見込部分を欠くが、内面には楼閣山水文の描かれるものである。

68は端反りの椀である。非常に薄く精緻な造りである。外面体部には蛟竜文が描かれ、第1層出土皿25とセット関係を成すものである。25は天正の兵火直前の、根来寺出土の染付皿では最終末と考えられているもので、この時期には椀は再び端反りの器形を持つものが現われるようになってくる。根来寺における染付椀の分類ではⅣ類とされるものである。

美濃瀬戸系

天目茶碗や灰釉の皿が主体である。

69は黒釉の天目茶碗である。全体に厚い造りで口縁部の屈曲は強い。胎土はや、粗く、灰白色である。露胎部への化粧がけは行なわれていない。

70は灰釉の水滲と考えられるものである。体部には満文状の陰刻が巡る。体部下位から外底部は露胎である。小さい把手状のつまみが付き、反対側には、おそらく、注口が付せられると思われる。体部下半は露胎である。

土師質土器

土師質火舎、こね鉢、火鉢などが見られる。

71は土師質の甕である。胎土はごく少量の片岩粒を含むが、比較的密で、明黄褐色を呈する。外面体部の調整は磨耗して不明であるが、内外口縁部付近は横ナデによって調整している。内面の口縁端部付近に凹線が一条巡る。内面体部は荒い刷毛で調整される。又、内面口縁下半から体部にかけて、黒いタール状のものが厚く付着している。

土師質皿

75・76は径10センチ前後、77・78は径9センチ前後のものである。77・78は根来寺に通有のタイプであり、75・76は第1層で大皿とした径11センチ前後のものとの器形的にきわめて類似している。72～74は径11センチ前後のものであるが、根来寺に通有のものとは調整技法が若干異なっている。又、胎土も通有のものに比して密で、砂粒も少なく、通有のものと同様に近畿全般に見られるものとの中間的な感じで、器形的にも口縁部が比較的シャープである。外面はほぼ全面に指頭痕を残し、横ナデは口縁端部付近にのみ施こされる。内面体部は丁寧に横ナデで調整し、内面中央部には刷毛調整と思われる痕跡が見られる。

近世陶磁

丹波焼、唐津焼、伊万里染付などが出土している。

79は丹波焼の水屋甕である。水平に拡張された口縁端部には二条の凹線が巡り、肩部から体部中位にかけても二十余条余りの巾の広い凹線を巡らせている。又、通例、肩部には硬化した双耳が付される。胎土は砂粒を多く含む粗い。胎土は灰黄褐色であるが、全体に泥漿を塗られて表面は灰茶褐色を呈す。

80は刷毛唐津の片口鉢で、折り近しの玉縁状口縁を持つ。胎土はわづかに赤味のある灰褐色で、外面体部下半及び口縁端部は露胎である。露胎部は赤茶褐色である。81は刷毛唐津の椀である。胎土は明るい赤褐色であるがや、粗い。内面見込の軸を輪状に削り取っている。

82は伊万里の染付の小振りの椀である。体部外面には草花文が描かれている。呉須の発色は黒灰色で悪く軸もや、灰味を帯びる。畳付の軸は削り取っている。83は染付の皿で、内面見込には一技の瑞果文が、又、体部には3単位の同様の文様が描かれている。外面は無文であるが外底には圓の青花銘が見られる。呉須は鮮やかで良好な発色を示している。

d. 第3層出土遺物 (86～91)

A-4区においてのみの調査である。この層は近世のものは皆無で、青磁 (86・87)、白磁 (88)、染付 (89)、美濃瀬戸系天目茶碗 (90)、土師質皿 (91) などが出土する。

青磁

86は端反りの椀である。灰白色の胎土にや、厚い透明感の強い草緑色の軸がかかる。全体に細

かい貫入が認められる。87は86と同一個体の可能性の強いものである。内底を欠くが、高台外面まで釉がかかり、畳付を含めて外底無釉のものと思われる。

白磁

大部分の白磁が皿で、椀は皆無である。

88は16世紀タイプと言われる通例の端反りの皿である。釉は艶がなく灰味を帯び、高台の張り付け方など、雑な造りである。

染付

89は内面見込に花鳥文を持つ茶筒底の皿である。外面体部には蕉葉文が描かれている。口縁部を欠くが、通例において、外面口縁下に美化した波濤文帯が巡る。畳付の釉は削り取っている。磁質の精良な胎土を持つタイプである。

土師質皿

91は根来寺に通有のものである。径11.5センチで大皿の法量を持つが、器高は1.6センチで浅い。又、口縁部も通例のものより肥厚している。

e. 第4層出土遺物(92)

A-3区のセクションベルト沿いのサブトレンチによって認められた層である。

92は美濃瀬戸系の灰釉おろし皿である。おろし目は細かく浅い。黄白色の比較的密な胎土を有し、内外面口縁部付近にのみ灰釉がかけられる。

2. A区遺構内出土遺物(図13-93~図17-159、図31-363~366、図版24~32、図版57)

SK04 (93)

第1層除去後に検出した土壌で、近世の遺物が出土する。

93は丹波焼の水屋裏である。水平に内外に肥厚した口縁端部には二条の中広く浅い凹線が巡り、外面体部にも数条の凹線が巡る。黄灰白色の粗い胎土に泥漿がかけられ、外面は茶褐色であるが口縁から内面にかけては黒灰色を呈す。

SK09 (94, 95)

第2層除去後の土壌で、SK05、SK10を切る。兵火後の再建時の遺構であるが、出土遺物には兵火以前のものが多い。

94は白磁の皿である。口縁の端反りのものであるが、胎土、釉共に精良で表面に光沢があり、造りも丁寧で、やや大形である。

95は土師質皿である。磨耗が激しく、調整等は不明であるが、根来寺に通有のタイプの大型である。

SK14 (96, 97)

第1層除去後に検出した土壌である。

96・97は伊万里の染付碗である。共に外面体部に草花文を描いたもので、呉須は黒灰色や灰褐色の発色を示す。

SK16 (100)

第2層除去後に検出される東西2.2メートル、南北3メートルの土壌で、SD09を切っている。近世の資料と共に若干の中世の遺物が出土する。

100は美濃瀬戸系の灰釉おろし皿である。灰釉は内外面口縁部付近にのみ薄くかかる。おろし目は浅く、巾も狭い。

SK17 (98、99)

第2層除去後に検出される一辺約3メートルの大きい土壌でSD09を切る。近世の陶磁器などと共に鬼瓦類が出土している。

98は周縁の板の部分に欠く鬼瓦の顔面と考えられるものである。角が2本付き、眉などはヘラ先による刺突文で表現している。表面全体にヘラ磨きかなされ、黒く鈍い光沢がある。99は顔面に欠く鬼瓦の周縁の板の部分で、竹管文状の円形の陰刻文が見られる。

SK19 (101～103)

第2層除去後に検出された径約1.5メートルの円形の土壌である。近世の伊万里磁器や京焼などに混じって、青磁や白磁など少量の兵法以前の遺物が出土している。

101は白磁の皿である。典型的な16世紀タイプと言われる端反りのもので、釉はや、灰味を帯び、光沢がない。高台の貼り付けなども雑である。

102・103は京焼の碗である。枇杷色の胎釉がかかり、全体に細かい貫入が見られる。髹釉で疊付の部分の釉は削り取っている。露胎部との境は赤橙褐色に発色する。

SK22 (121、122)

第2層除去後に検出された土壌である。

121は伊万里の草花文の染付碗である。呉須は黒味を帯び発色は不良である。

122は土師質皿である。径7.2センチ、高1.4センチの小形である。胎土にはほとんど砂粒を含まず精良で、茶褐色を呈す。調整は丁寧で、外底も指頭痕を残さずナデている。内底は不定方向にナデ、体部は丁寧なヨコナデで調整する。口縁端部はシャープである。

SK30 (123)

第2層除去後に検出される一辺2.5メートルの土壌で、やはり同一の遺構面から検出されるSB02の掘立柱の柱穴によって切られている。近世の遺物に混じって少量の古い時期の遺物が出土している。

123は滑石製の石鍋の口縁部である。石鍋は根来寺においては、割花文系の青磁、同安窯系の青磁、口禿の白磁、瀬戸おろし皿などと共に、ごく少量しか出土しない遺物のうちの一つである。

SD02下層 (105~120)

第2層除去後に検出された石組の溝で、SD1003に注ぎ込む。兵火以前の溝を再使用していた可能性があり、下層から比較的多くの、兵火以前の土師質皿が出土している。

105・106は根来寺に通常に見られるタイプの小皿で、口縁部の強い横ナデによって口縁部が肥厚している。107~114は第3層出土の91と同様の、器高の浅いものである。115・116は通常のタイプの大皿である。117~119は第2層出土72・73と同様のもので、比較的シャープな口縁部を持ち、内面には明らかな刷毛による調整が見られる。120は117~119ときわめて類似した胎土を持つものであるが口縁部が内彎するなど器形がや・異なり、径約13センチで大形である。磨耗しているため調整は余り明らかではないが、内面の刷毛による調整は見られない。

SD09 (104)

第2層除去後に検出された溝であるが、SD08、SK16・17に切られる。なお、SD08は第1層除去後に検出された石組の溝である。

104は伊万里の染付の鉢である。径32センチを計る大形品で、鈔皿風に体部が口縁下部で外方に拡く器形を持つ。呉須の発色は良好で、疊付の軸は丁寧に削り取られている。外底には3ヶ所の小さな目跡が見られる。内面は中心に波溝と思われる文様と周囲に花文が見られ、外面にも折枝風の花文が巡っている。

SD10 (124, 125)

第2層除去後に検出される巾約1.5メートルの溝で、SK11に切られている。

124は高麗の象嵌青磁の瓶である。推定器高50センチに及ぶ大形品の頸部から肩部にかけての破片である。胎土はかすかに赤味を帯びた灰白色で、きわめて堅緻である。や・失透した灰青色の釉が薄くかかる。頸部には白泥による蓮弁文が巡る。頸下部から肩部にかけての文様は不明であるが一部に黒泥の象嵌も見られる。

125は兵火時の根来寺に通常に見られるタイプの土師質皿で口縁部の強い横ナデによって端部が肥厚している。外底には乾燥時の質子の痕跡を残している。

SD11 (126, 127)

第2層除去後に検出の巾約2メートル、深さ約25センチの溝で、SB01、SK16に切られている。出土遺物には兵火以前のものが多いが、少量の近世のものが見られる。

126は白磁の皿である。胎土はや・ざっくりして、乳白色で艶のある釉が高台近くまでかかり、体下部は露胎である。おそらく腰折れの器形を持つと思われる。高台は疊付で外方から面取りされるが、断面四角でや・外方に広がる。

裾府系の白磁が、15世紀代に見られる体部下露胎で割高台のものなどがあるタイプの白磁に、系譜的に直接変化するか否かの問題は別にして、少くとも器形的にはその過渡的段階にあるもの

のように思われる。

127は土師質のこね鉢である。胎土には比較的多くの砂粒を含み、灰白色を呈す。内面を刷毛で調整した後、口縁部を横ナデし、更に外面口縁付近に横方向、体部に縦方向のヘラ削りを行っている。内面体部には浅い樽目状の摺目が見られる。

SG02 (128-154)

第2層除去後に検出された池状遺構であるが、堆積した暗青灰色粘土が上層に影響したためと思われ、近世の遺物は皆無である。比較的多量の土器類の他に、瓦類や箸(150)、杭(151)、紐を付ける角孔を穿った桶材(152)などの木製品が出土している。

128は内面見込に印花文を持つ青磁の碗である。暗灰色の粗い胎土に透明度の高い暗緑色の釉が薄くかかる。釉は高台途中までかかり、畳付に及んだものは削り取っている。

129は非常に大形の白磁の端反りの皿である。釉は光沢があり、造りも丁寧である。130は通例の16世紀タイプと言われる白磁の皿で、釉は灰味が強く光沢がない。131は白磁の坏である。薄い造りで胎土は精良であるが、釉は光沢を欠く。

132は染付の皿である。端反りの器形を持つもので、内面見込に羯摩文、外面体部に牡丹唐草文がや、太い濃筆で一気に描かれる。呉須の発色は余り良好でなく、くすんで黒っぽい。胎土は粗く黄白色でや、軟質である。畳付の釉は削り取られ、外底は無釉である。なお、内面見込には直接の重ね焼きを思わせる、上部に乗せた皿の畳付による痕跡が残っている。

132は赤絵の皿である。16世紀タイプと言われる白磁の皿に、赤と緑の上絵付けで、草花文らしい文様が描かれている。

134は美濃瀬戸系の灰釉皿である。黄白色の粗く軟質な胎土に灰黄色の釉が薄くかかる。

135は常滑焼の小形の甕である。口縁部は下方へのみの折り返しで、少し垂下している。胎土は須恵器に近く堅緻で、暗灰色を呈す。363・364はや、大形の常滑焼甕である。363は外方に広がった口縁を持つが、口縁端部はわずかに上方への拡張の傾向を示している。暗灰色を呈し、表面には艶があり、堅緻である。口縁上面及び肩部に暗緑色の自然釉がかかる。364の口縁はすでに上下に拡張している。胎土は赤褐色で自然釉がかかる。垂下した口縁部の巾はかなり広いが、頸部とは密着していない。

136は備前焼の四耳壺である。胎土は堅く滑らかで赤褐色を呈す。肩部には疎らに胡麻状の自然釉が見られる。365は備前焼大甕の口縁部で、外面に波状の段を持つ天正兵火直前のものである。

137-149は土師質の皿である。138-147は根来寺に通有のタイプである。径9センチ前後のもの(139-142)、10センチ前後のもの(143-146)、11センチ前後のもの(147)があるのは通例だが、138は径7.2センチで、非常に小さい。137は第2層出土72・73、SD02下層出土117-119と同様のタイプの小皿である。胎土も比較的精良で砂粒等をほとんど含まず、や、灰味のある黄白

色を呈す。粘土円板から体部を起こし、外面に指頭痕を残し、内面は刷毛状器具で整形の後、外面口縁部から内面全面を横ナデで調整している。内面のナデは時計回りに回転し、「の」の字状に外方に抜いており、この点は近畿地方全般に見られる16世紀中葉前後のタイプの土師質皿の調整と同様である。148・149はいわゆる白土器の類であるがや・特異で、根来寺以外では余り類例の見られない口縁部がや・内変する器形である。よく水販した精良で緻密な乳白色の胎土を持つ。外面体部下半から底部にかけては指頭痕を消すように軽くヨコナデをし、内底は不定方向にナデ、内面体部から外面体部上半にかけて強いヨコナデを施こしている。天正の焼土層からの出土は余りなく、この地方での瓦器消滅直後の時期のものと考えられ、ヘソ皿との共伴例が知られる。

153・154は便化した唐草文の軒平瓦である。共に周縁の両側端部が拡張しつつある。

SD03 (155)

SE02と共に第1層除去後に検出した井戸である。崩壊の危険があったためほとんど掘り下げておらず、ごく少量の近世の遺物が出土する。

155は土瓶とでも言うべき器形で、注口を欠いている。非常に薄い造りで、体部下位から底部は露胎である。艶のある鉛色の釉がかかり、全体に細かい貫入が見られる。体部には月白色の釉で文様が付されている。生産地等は不明である。

SF01 (366)

第2層除去後に検出した溜料状の遺構であるが、兵火以前の備前焼甕(366)が出土している。口縁はや・扁平になったものの、末だ玉縁の形状を保ち、撫で肩で球形に近い体部を持っている。胎土は砂粒をや・多く含み粗い、この時期特有のものであるが、焼成は比較的良好で、表面は赤褐色を呈す。胎土は明るい黄橙褐色に焼き上っている。

桶ビット (156~161)

第2層除去後に検出された二連式の埋桶遺構で、桶ビットと通称している。多量の瓦類や箸(160、161)などの木製品が出土する。瓦類は軒丸瓦(157)、軒平瓦(158、159)など、大部分が近世のものであるが、156は兵火以前のものの可能性が高い。

3. C区包含層出土遺物(図17-162~図22-237、図31-367~図32-379・図版33~41、図版57)

a. 表土及び床土出土遺物(162~164)

近世や近代の遺物に混じてかなり多くの兵火以前の遺物が見られるが、大部分が小片になっている。

162・163は美濃瀬戸系天目茶碗である。162は黒釉天目で、胎土は粗く、黄灰色を呈する。同一個体と思われるしいたけ高台の出土が見られる。163は褐釉の薄くかかるもので、露胎部には茶褐色の化粧がけが行なわれている。高台は輪高台である。

164は備前焼の摺鉢である。口縁部が上方に広く拡張し、口縁外面に三条の凹線を巡らしてい

る。摺目は中心から渦巻状に密に付されるものである。胎土は比較的精良でセピア調の発色をしているが、表面は暗灰色を呈する。

b. 第1層出土遺物 (165~187、376~370)

青磁 (165~167)・白磁 (168, 169)・染付 (170~172)・青釉皿 (173)・鉄釉系陶器 (174~175)、美濃瀬戸系陶器 (176~179)、土師質土器 (180)、土師質皿 (181~187)、又、東播系須恵質片口や漆焼と呼ばれる泉州産の土師質甕なども少量見られる。出土遺物の大部分が兵火以前のものであるが、伊万里染付を中心とする近世の遺物もごく少量出土している。

青磁

椀、盤、香炉などがあるが、量は余り多くない。

165は内面体部に丸彫りの蓮弁文の見られる盤である。灰白色の胎土に草緑色の釉が厚くかかる。外底の釉を輪状に削り取り、露胎部との境は赤橙色の発色をする。

166は内面に型押しした蓮弁文を持つ椀である。精良な、わずかに灰味のある胎土に失透して白っぽい釉が薄くかかる。167は線描蓮弁文の椀である。内面には印花文とヘラ描による割花文が描かれている。灰白色のや、粗い胎土にくすんだ草緑色の釉が薄くかかる。外底の釉は輪状に削り取っている。

白磁

白磁も青磁同様に少量である。通例の端反りの皿の他に少量の菊皿や体部下半露胎で割高台の坏、あるいは青白磁の唐草文の梅瓶などが見られる。

168は大形で丁寧な造りの端反りの皿である。釉は光沢があり、純白に近い。疊付の釉の削りも丁寧である。169は16世紀タイプと言われるもので、168に比して造りが雑である。釉には光沢がなくや、灰味を帯びる。

染付

染付は青磁、白磁に比して多く出土する。椀や呉須手の盤が少量見られるが、大部分が皿である。皿には端反りのものと、口縁の内側するものが見られ、量的には端反りの器形が多い。

170・171は端反りの皿である。外面体部にや、太い濃筆で牡丹唐草文が描かれる。内面見込を欠くが、羯磨文もしくは玉取獅子文の描かれるものである。

172は外面体部に牡丹唐草文が繊細な筆致で描かれる椀である。口縁端部はシャープで丁寧な造りである。器形は蓮子椀で、内面見込には牡丹文の描かれるタイプである。大形の端反りの鉢や、端反りの皿などとのセット関係が知られている。

その他の中国陶器磁

その他の中国陶磁には褐釉四耳壺や釉の小皿などがある。

173は鮮やかな空色のソーダ釉のかかる型押しの小皿である。口縁は稜花になる。

174・175は褐釉の四耳壺である。共に縦耳が付されるもので、や、粗い灰白色の胎上に艶のない灰白褐色の釉が薄くかかる。

美濃瀬戸系

美濃瀬戸系陶器の出土も余り多くない。瀬戸の天目茶碗や美濃の灰釉皿が主体で、瀬戸の灰釉盤や褐釉茶入が少量見られる。

176・177は褐釉天目茶碗で、共に比較的シャープな端部である。176は火中して釉が飛んでいる。胎土は黄白色で軟質である。177は灰白色の堅緻な胎土である。かすかに禾目風の釉の流れが認められる。

178は灰釉の盤である。おろし皿に類似する口縁部を持つがおろし目は認められない。黄白色のや、粗い胎土に黄緑色の釉が内外面口縁付近にのみかかる。

179は灰釉の皿である。や、灰味のある黄白色の粗い胎土に灰緑色の釉が薄くかかる。

備前焼

備前焼では甕の口縁部が多く出土している。口縁の玉縁がや、扁平になりかけた段階のもの(367・368)や、完全に扁平になったもの(369)、波状の段が付き外傾するもの(370)などが見られる。

土師質・瓦質土器

土師質や瓦質のこね鉢、火鉢、瓦質火舎などが主体であるが、少量の鍋や釜などが見られる。根来寺における煮沸形態の土器ははなはだ不明である。15世紀初頭～前半までは土師質の鍋や羽釜が見られるが、以後はまったく姿を消してしまう。おそらく、鉄製品に移行すると考えられ、それらしいもの、小破片は数例見られるが、全容を知り得るものは出土していない。材質の関係もあり、又、何度でも錆掛け直して再使用が可能という点によるものと思われる。

180は砂粒を多く含む暗茶褐色の土師質羽釜である。外面口縁下に数条の凹線が巡り、や、上向きの鈎が付される。内面は巾約2.5センチを1単位とする刷毛によって調整し、内面の口縁付近から外面鈎の部分にかけては横ナデで調整されている。外面体部は縦方向のへら削りによって整形している。

土師質皿

土師質皿にはA区SG02に見られた、瓦器消滅直後の148・149のタイプや、ヘソ皿の類、又、内面のナデを「の」の字状に抜く16世紀代に近畿全般に見られるタイプなどが少量出土している。しかし、大部分は16世紀代の根来寺に特有の、強い横ナデによって口縁部の肥厚するものである(181～187)。181はSG02出土138と同じく径7.2センチの特別に小形のものである。

c. 第2層出土遺物(188～212、371～375)

青磁(177)・白磁(188～192)・染付(193～196)・鉄釉系陶器、美濃瀬戸系陶器(198～201)、

大量の備前焼（203～207・371～375）、常滑焼（202）、少量の丹波焼壺、土師質・瓦質土器、土師質皿、瓦などの兵火以前の遺物、又、伊万里染付、京焼、丹波焼などの少量の近世陶磁が出土する。中国陶磁では青磁が非常に少なく、白磁、染付が主体である。なお、この層に限らず、根来寺の兵火以前の遺物では丹波焼はきわめて少量で、器形は大形の壺に限定されている。おそらく葉茶壺としてのみもたらされたと思われる。

青磁

青磁は香炉や椀などが少量出土するにすぎない。椀には口縁の外反するもの、内彎するもの、線描蓮弁文を持つものなどがある。

197は口縁がや、内彎気味なもので、灰白色の胎土に灰緑色の釉が厚くかかる。通例、釉は高台内面途中までかかり外底を無釉で残すか、あるいは、総釉の後、外底の釉を輪状に削り取るものである。

白磁

白磁は少量の坏、菊皿を除いて大部分が端反りの皿である。

188～190は大形で、精良な胎土と光沢のある釉を持つものである。190の疊付の釉の削りなども丁寧である。191は通例の小形の皿である。胎土は灰白色で、表面に小さな黒斑が浮き、釉には光沢がない。又、高台の貼り付けも余り丁寧ではない。出土する大部分がこのタイプのもので、大形で精良なタイプのは少ない。

192は坏である。一般的なものよりや、大形である。釉は、特に外面において、光沢がない。胎土は精良で、高台の造りなどは丁寧である。

染付

染付には椀、皿があるが、椀は少量で、大部分が皿である。椀には蓮子椀と、饅頭心型の底部を持つもの、又、前述の蚊竜文の皿とセット関係にある端反りの椀などがある。皿は基筋底を持つもの、口縁の内彎するもの、端反りのものなどがあり、量的には口縁の内彎するものが最も多い。

193は外面体部に牡丹唐草文、内面見込に玉取獅子文を持つ端反りの皿である。疊付の釉は削り取られているが、外底一部に珪砂状のもの、付着が認められる。194は外面体部に牡丹唐草文、内面見込に羯摩文を持つ小型の端反りの皿である。外底は筆で薄く釉が塗られている。195・196は内面体部及び見込に蚊竜文の描かれる口縁の内彎する皿である。外面体部は無文であるが外底に「富貴佳器」銘が見られる。根来寺焼亡直前の時期のものと考えられている。

染付は多くの場合、その文様構成上、椀、皿、坏、鉢などがセットで製作されたと考えられている。又、椀においては16世紀後半の時期に再び端反りの器形が現われることは前述したが、この蚊竜文の口縁の内彎する皿と端反りの椀というセット関係の組み合わせは、現在根来寺で知られ

る唯一のものであり、このセットが天正の兵火に最も近い時期の染付の椀、皿の組合わせであると考えられる。なお、このセット関係には坏の存在も知られている。

美濃瀬戸系

美濃瀬戸系の陶器はきわめて少量である。小片ばかりであるが、灰釉瓶子、灰釉平碗、天目茶碗、灰釉皿などがある。

198・199は灰釉平碗である。198は黄白色の粗く軟質な胎土に光沢のある黄緑色の釉が薄くかかる。199の胎土はや、磁質で堅いが、やはり粗く灰白色で、釉は余り光沢がなく灰緑色を呈する。

200は褐釉の天目茶碗である。器内は比較的厚く、口縁で急にシャープに尖り、口縁部の屈曲はない。胎土は粗く、や、黄味のある灰白色である。

201は灰釉の端反りの皿である。黄白色の粗い胎土に灰緑色の透明な釉が薄くかかる。

常滑焼

根来寺で出土する国産の焼き締め陶の大部分が備前焼で、常滑焼は少量である。又、器種も裏に限定され、出土時期も15世紀初頭ないし前半までで、それを境に備前焼に駆逐されてしまう。

202は小形の甕である。口縁部はN字状に折り返されるが上方への拡張のみで、折り返しの中も狭い。暗灰色の粗い胎土で、外面には灰白色の自然釉がかかる。内面体部には粘土紐の巻き上げ痕を残し、頸部は横方向のへう削りで整形している。内面口縁直下から外面頸部にかけて横ナデによる調整が認められる。

備前焼

備前焼には壺、甕、摺鉢、水屋甕、徳利、水指などがある。

203は小形の壺である。胎土はや、粗く灰褐色で外表面は灰白色、内表面は明るい灰茶褐色である。外面肩部には櫛描の波状文が巡る。204は大形の壺である。胎土は堅緻で灰白色を呈す。外面頸部には自然釉がかかる。

205は非常に大形の水屋甕である。胎土は堅くセピア調に焼き上がり、表面はや、赤味のある暗茶褐色である。口縁部から頸部及び肩部には灰緑色の自然釉が厚くかかる。水屋甕は次第に無頸化していくが、これはまだ胴部に三角凸帯が巡り、凸帯上の双耳には縄目の表現のある段階のものである。206も水屋甕で、や、小形である。205に比して頸部に退化が見られるが、これも凸帯が凹線に変化する以前のものと思われる。

207は水指と思われるものである。暗灰色を呈し、口縁部には自然釉がかかる。内面には巻き上げ痕を残し、口縁から外面体部は横ナデで調整する。

371～376は大甕である。371、372は口縁の玉縁がかなり扁平になっており、波状の段の付く直前のものである。撫で肩で体部は比較的丸い。373～376は兵火直前の時期のもので、口縁は外反して上下に長く伸び、明瞭に段が付く。大変に大形で、おそらく三石入と思われる。

土師質・瓦質土器

土師質、瓦質の土器には火鉢、火舎、こね鉢などがある。

208～211は瓦質のこね鉢である。209～211は内面を刷毛で、口縁部を横ナデで調整し、外面はへら刷りで整形する通常の技法による。208はこれらとや、異なり、外面の口縁直下を刷毛で調整している。又、内面には刷毛の調整は行なわれず、横ナデを施こしているようである。これらはすべて片口の器形で、内面には櫛状の器具による浅い摺目を持つ。なお、煮沸に使用する可能性も考えられるが、その痕跡のあるものは現在のところ認められていない。

222は瓦の転用品と考えられ、円盤状に2次加工したものである。よく磨耗している。用途は明らかではないが、あるいは鍋などの煤や焦などを刮げる道具であろうか。

土師質皿

212～217は根来寺で兵火時に通有に見られるものである。218はA区第2層出土72・73などと同様の黄灰白色で砂粒をほとんど含まない胎土のものである。器形は根来寺に通有のタイプに似るが造りは丁寧で、外底も軽くナデで指頭痕を消している。内面は横ナデや不定方向のナデで調整し、A区SG 02出土137のような刷毛の痕跡は見られない。219～221はよく水焼した精良で純白に近い胎土のA区SG 02 148・149のタイプのものである。219は径7.5センチの小形のものである。口縁内外面の横ナデを直上に抜き上げ、その後、内底を回転を伴ってナデ、「の」の字状に内面口縁部をかすめて外方に抜いている。外底は外方から中心に向う指によるナデで指頭痕を消している。220は径10.8センチ、221は径10.4センチで法量はほとんど同様であるが、両者には若干の器形上の差異がある。220は外面体部にへらの背などによる段が付されることに器形上の特徴がある。内面は内底を不定方向にナデ、体部の横ナデは真上に引き抜いている。外底の指頭痕は比較的丁寧に消している。221は内面の調整に特徴がある。内底を不定方向にナデ、次に回転を伴ない体部と底部との境付近のや、中心寄りにへら先によって凹線を巡らし、この凹線の外に底部から体部の立ち上りを造りながら強くナデ、次に体部上半から口縁に横ナデを施す。この横ナデは真上に抜いている。外面は底部の指頭痕を消し、体部から口縁にかけての横ナデは右回転で外上方に斜めに抜いている。

これらの瓦器消滅直後に現われる乳白色の胎土を持つ皿には219のように径7センチ前後のものと、径10～11センチのものがあり、後者においては220のタイプ、221のタイプの他にSG 02出土148・149の3タイプが知られている。

d. 第3層出土遺物 (223～237・377～379)

第3層は兵火直前の遺構の直上層である。遺物は余り多くないが近世のものはまったく含まない。中国陶磁も少量であるが、そのうちで最も多いのは白磁で、順に染付、鉄釉系陶器、青磁(223)となる。なお、小片であるが赤絵(224)が出土している。

美濃瀬戸系も少量である。灰釉瓶、天目茶碗、灰釉平碗、灰釉縁描蓮弁文椀、灰釉皿などの小片が見られる。

常滑焼（225）、丹波焼壺なども少量である。

備前焼は比較的多いが主体は甕（376～379）で、その他には壺（227・278）や水屋甕（226）、摺鉢などが見られる。

土師質、瓦質土器は比較的多い。火舎、こね鉢（229～231）、火鉢（232）などがある。

土師質皿（233～237）には根来寺に通有の口縁部の肥厚したタイプとよく水滲した乳白色の胎土を持つものとがほぼ同量出土する。なお、瓦器は小片も出土しない。

青 磁

椀、皿、盤、火舎などがあるがほとんどが小片である。

223は端反りの皿である。器内が厚く、口縁端部を丸くおさめている。断面四角の低い高台が付くものと思われる。灰白色の胎土に暗緑色の艶のある釉は畳付を越えて一部外底にまわるものと考えられる。

赤 絵

少量の染付と共に小片の赤絵皿が認められる（224）。16世紀タイプとされる灰味が強く光沢のない端反りの白磁皿の外表面体部に赤褐色と緑の上絵付で草花文が描かれている。

常滑焼

225は小形の甕で、N字状に折った口縁部は下方に大きく垂下している。暗灰色で石英質の砂粒を多く含む粗い胎土を持ち、表面は灰黒色を呈す。外面には自然釉がかかる。

備前焼

226は水屋甕である。体部に三角凸帯と縄目の表現をした双耳を持つ段階のものである。胎土はや、粗く、暗灰色やセピア調の赤褐色を呈し、内表面はや、青味のある暗灰色、外表面は灰褐色に発色している。内表面体部は巻き上げ痕を残す程度に軽くナデを施すが、内面口縁部から外面への横ナデは丁寧である。

227・228は壺の底部である。227の胎土は暗灰色で堅緻であるが、228は灰白色で軟質である。227は外面を底部近くまで荒い横ナデで仕上げ、228はへら削りによる整形痕を残したまゝである。

377・378は甕である。377は小形で、口縁部の波状の段が出始めた段階、378はおそらく二石入と思われる大形のもので、兵火直前の時期のものである。

土師土・瓦質土器

第3層の他の遺物に比して多く出土している。こね鉢、火舎、火鉢などがあるが、量的に最も多いのはこね鉢である。なお、実際に摺るという機能を期待されていたかどうかは別として根来寺出土のこの種のものにはすべて浅い摺目を持ち、片口が付されている。

229は径37.5センチを計る大形の瓦質こね鉢である。胎土は灰白色で焼成は良好である。外表面は灰黒色で堅緻である。内面下半は使用によって磨耗しており調整が明確ではないが、横方向の刷毛目がかすかに残り、この上に体部上半に横ナデを施こしている。この横ナデは口縁部を越えて外面に及ぶが、横ナデの後、口縁部直下を横方向のヘラ削りで整形している。内面の櫛状器具による摺目は浅く細い。230も瓦質のこね鉢である。径32.5センチでやや小振りである。少し軟質で焼成も余り良好ではない。口縁部外面には浅い凹線が2条巡りかすかに波状になっている。口縁部を中心に内外面に横ナデを施こし、内面体部に刷毛目は見られず、ヘラの腹を横にして削ったような痕跡が見られる。外面は口縁直下を横方向、以下を縦方向にヘラ削りがされる。231は土師質のこね鉢である。赤茶褐色ないし黄褐色を呈し、胎土は石英質の砂粒を多く含んで粗い。風化して調整等は余り明らかではないが、外面口縁直下に横方向、体部に縦方向のヘラ削りが認められる。

232は瓦質の火鉢である。外面口縁下に2条の凸帯が巡り、その間に印花文が押されている。内面体部はヘラ削りで整形され、内面口縁部付近から外面体部にかけて横ナデ、更に口縁端の平坦部は横方向のヘラ磨きで調整されている。又、下段の凸帯から体部は、底部から口縁部の方向へ、縦方向のヘラ磨きが施こされ、この部分は銀化したように光っている。

土師質皿

233～235は根来寺に通有のタイプである。226・227は良く水滌した乳白色の胎土を持つもので、第2層出土221のタイプである。

4、C区遺構内出土遺物（図22—238～図30—359、図32—380、図版41～57）

SK1001（238—254）

第3層除去後に検出され、SK1002を切り、菩提川の旧河道SX1001によって切られている。1辺約4メートルの大きい方形の土壌で、兵火時のものと思われる焼土の堆積が見られる。青磁・白磁・染付、備前焼、土師質土器、土師質皿、瓦など比較的多くの遺物が出土する。なお、中国陶磁における青磁、白磁、染付の出土量はほぼ同量である。

青磁には椀、算木文の盤などがある。238は無文で口縁部の内脣する器形の椀である。灰白色の胎土に不透明な灰緑色の釉が厚くかかる。釉が厚いため端部などにやや鈍い感じがある。総輪で外底部の釉を輪状に削り取っている。露胎部は赤橙色に発色し、輪陶枕の痕跡を残している。239は線描蓮弁文の椀であるが通例のものとは異なる特徴を持っている。高台の径や巾が大きく、断面は台形である。胎土はむしろ白磁に近く、釉は厚く透明度の高い淡く青味のある草緑色である。外面には口縁部直下にヘラ先による凹線、体部にはやはりヘラ先による線描蓮弁文を有する。剣頭は蓮弁の単位をほとんど意識せずに付せられるようである。釉は畳分の部分で止まり、高台内面及び外底は無釉である。240は通例の線描蓮弁文の椀で、ヘラ先による蓮弁は浅く細い。又、剣頭は蓮弁の単位を意識しない。器内は薄く、やや小振りで、体部外面に回転ヘラ削りの痕跡を

残している。胎土は黄灰色で粗く、や・軟質である。釉は艶がなく不透明でくすんだ黄緑色に発色している。

白磁はすべて端反りの皿である。241は径19.5センチを計る大形品である。胎土、焼成ともに良好である。釉は光沢のある乳白色で、高台の貼り付けや壺付の釉の削りなど、造りも丁寧である。242・243は16世紀タイプの典形と言われるものである。242は黄味の強い乳白色を呈するが釉には艶がない。口縁端部は鈍く、高台の貼り付けや壺付での釉の削り取りも雑である。243は灰白色の細斑が無数に見られ、やはり242同様に雑な造りである。

染付は1片の呉須手の盤以外すべて同一文様の端反りの皿である。244～246は楼閣山水文を内面見込に持つものである。外面体部には見込同様の荒いタッチで牡丹唐草文が描かれている。釉は総じて灰味が強く黒ずみ、発色は余り良好ではない。外底には放射状の鈍痕を残している。

土師質皿には兵火時の根来寺に通有のもの、良く水煎した乳白色の精良な胎土を持つものなどが主体を占めるが、少量の近畿地方全般で見られるタイプも出土する。247～251は強い横ナデで口縁部の肥厚した根来寺に通有のものである。252・253は近畿地方全般にわたって見られるもので、247～251と比して良好な胎土と焼成を持つものである。磨耗して調整が不明である。径9センチ前後のこのタイプの皿においては、横ナデを「の」の字状に外方に抜くが、通常、このような大皿では横ナデを一度引き戻してから上方に抜くようである。

254は長辺2.0センチ、短辺1.5センチ、厚さ0.3センチの楕円形の鹿角製品である。過去3例の出土例があるが用途は不明である。一方の面の中心部が浅く円形に凹むものも知られる。

SK1003 (255～259)

SK1001とはほぼ同時期の遺構と考えられ、埋土は焼土混入の赤褐色土である。青磁・白磁、朝鮮製の青磁碗、土師質皿、瓦などの遺物が出土する。

255は青磁の線描蓮弁文碗である。黄白色で軟質の粗い胎土に黄緑色の艶のある釉がかかる。釉は壺付を越え一部外底にまわるが、高台内面途中から外底の釉を雑に削り取っている。なお、内面見込中央部に同心円状に細かい擦痕が認められる。特に青磁碗において、このような擦痕のあるものが往々にして見られ、茶筌によるのではないかとする見解がある。茶筌で磁器に傷が付くかどうかの検討は別にして、あたかもそのような擦痕ではある。

256は白磁の稜花皿である。段皿風の器形を持ち、外面体部には丸彫りによる蓮弁を有する。胎土は灰白色で釉には細かい灰色の斑点が浮かび光沢がない。

257は朝鮮製の俗に言うソバ茶碗の類である。とりあえず青磁として分類しておく。火中して釉が飛んでいる。胎土は黒灰色で粗いが堅い。

258・259は根来寺に通例に見られるタイプの土師質皿である。

SK1008 (260~262)

焼土の落込みが見られる径約3メートルの土壌で、セクションベルトにかかって中央部に円形の石組みが見られる。青磁碗、白磁皿、備前焼甕などが出土する。

260は白磁の端反りの皿である。大形であるが通例のものに比して釉に光沢がなく灰色の細かい斑点が浮かんでいる。261は小形の端反りの皿で、胎土、焼成共に余り良好ではなく、釉には灰色の斑点が浮かび光沢がない。

262は備前焼の水屋甕である。完全に無頸化したものである。双耳は縄目の表現を失ない、三角凸帯はすでに沈線に変わった段階のものである。胎土はやや粗いが堅く、暗灰色を呈す。肩部には自然釉によるいわゆる胡麻がかかっている。

SK1024 (263)

SB1001下層の径0.6メートル余りの円形の土壌で、SB1001に伴う施設であるか不明であるが、兵火時の根来寺に通有の土師質皿が出土している。263はその典型的なタイプである。

SD1003 (280~290)

基底部から永禄十二年(1570)銘の宝きよ印塔の台座が出土する巾約3メートル、深さ約1.5メートルの石組の溝で、青磁・白磁・染付、美濃瀬戸系陶器、備前焼、丹波焼、土師質土器、土師質皿、瓦など多彩な遺物が見られる。なお、第2期においても再使用されたため、上層からは近世の遺物も出土している。

281は青磁線描蓮弁文碗である。内面には橘播の花文と、中央部に印花文が見られる。外面の蓮弁文はへら先によるが、山形の鋸頭は蓮弁の単位を意識して付されている。釉は光沢のない淡草緑色である。総釉で外底の釉は輪状に削り取っている。

282~284は白磁の端反りの皿である。すべて16世紀タイプと言われる小形のもので、釉には余り光沢がなく灰色の斑点が浮んでいる。

280は染付の碗で、蓮子碗型の器形を持っている。外面体部下半には蕉葉文が巡っている。内面見込の文様は波濤と法螺貝である。

285は美濃瀬戸系灰釉の皿である。やや唇筋底風の底部を持ち、高台は削り出し高台である。外底には輪陶沈の痕跡があり、内面見込は円形に釉を削り取っている。火中して全体に黒ずみ釉は暗黄灰色を呈す。露胎部には煤状のものが附着している。

286~289は備前焼である。この遺構出土の備前焼は大半が大甕片で、小物は少量である。286はやや大形の壺である。玉縁状の口縁と余り肩の張らない器形である。赤茶褐色の堅い胎土で、口縁上端部と肩部には自然釉がかかっている。287は小形の壺である。片口の付されるものであろうか。胎土は中心部が赤褐色の発色をする。いわゆるサンドウィッチ状を呈し堅緻である。表面は、内面が明茶褐色、外面が灰褐色である。頸部から口縁内外面の横ナデは非常に丁寧である。289は

小形の無頭壺である。灰白色の胎土はやや軟質で、表面も灰白色を呈している。口縁直下から肩部にかけて巻き上げ痕を残している。288は花生けのようなものと思われるが明らかではない。口縁端部は2次的に平滑に研磨している。又、内面には轆轤による紋りの痕跡も見られる。胎土は軟質で粗く灰褐色で、内外表面は暗茶褐色を呈す。

290は土師質のこね鉢であるが、通例のものとは口縁部の形状などが異なり、下方への拡張が見られない。外面の調整は磨耗により不明であるが、内面は口縁部を斜めにへら削りで面取りをし、後に体部から口縁部にかけて横ナデで調整しているようである。内面体部の櫛状器具による摺目も通例のもののように浅く細いものではなく、備前焼摺鉢に見られるように深く太い。胎土は砂粒を多く含み、明黄褐色を呈する。

SD 1004 (264)

近世の遺構でSD 1003に流れ込む石組の小排水溝である。しかし、石組の上段と下段に少しずれがあり、兵火前の石組に積み足しを行ったことが考えられ、下層から264のような兵火時に通有な土師質皿が出土している。SD 1005などと同時期に機能していたと思われる。

SG 01

SD 1003の上に乗る近世の池状遺構で、径約20センチの自然木上に人頭大の石を積んで護岸している。遺構内には朽葉や小枝などが厚く堆積している。兵火以前の遺物も少量見られ、瓦や花崗岩製の鉢(267)、摺目を欠くがやはり花崗岩製の茶白の下白(268)などが出土している。

265は鬼瓦の頭部の宝珠と考えられるものである。266は巴文の軒丸瓦である。巴の中心部の空間が広がるが、巴の先端はやや尖っている。巴の尾の先が結合して圏線を構成し、珠文は密で小さい。

SB 1001 (269~279)

SV 1001やSV 1002、SD 1003などと同一の方位をとる一辺約5メートルの小さい方形の建物である。建物内から乳白色の良く水臙した胎土を持つ土師質皿が多く出土している。

269は瀬戸の褐釉壺である。胎土は灰白色で堅緻である。内面は巻き上げ痕を残し、薄い褐色の釉が流れ込んでいる。外面体部下位は露胎で、回転へら削り痕を残す。外底には回転を伴うへら削りが見られる。

270~272は径7センチ前後のいわゆるヘソ皿であるが、きわめて良く水臙された乳白色の胎土を持つものである。外底を指で凹ませ、ふくらんだ内底をナデした後、内外面体部を横ナデで調整する。横ナデは真上に引き抜いている。又、外底はナデで指頭痕をきれいに消し去っている。

273は第3層出土219と同様のものである。274・275は第2層出土221のタイプである。275~278は第2層出土220のタイプである。279は内面口縁直下がやや内彎するため体部の横ナデが及ばない部分が生じ、これにより、内底の不定方向のナデは体部を含め内面全体に施こされ、その後体

部のみを横ナデで調整していることが判明する。279は径12センチを越える大形の皿である。胎土に若干の砂粒を含み灰茶褐色を呈すが焼成は良好である。磨耗して細かい調整は不明であるが、内底中央部に指頭痕を残している。体部のナデは2段に分けて行なっているようで、体部上半の強い横ナデで、体部途中から内側に屈曲している。

SE 01 (291~301)

残存する数少ない近世の遺構のうちの一つである。遺物の大部分は瓦で、きわめて大量である。軒九瓦や軒平瓦に混って埴(298)も少量出土している。陶磁器類はごく少量である。その他には木桶の底部(302)などの木製品も出土している。

291は巴文の軒九瓦である。巴の先端は太く丸いが珠文は小さく密である。295は九瓦である。玉縁の取付角度がやや下っている。側端部の面取りはされておらず、木口部の面取りも余り大きくない。299は軒平瓦で、すでに周縁両端が大きく拡張している。300は周縁端部の拡張が始まりかけている段階の軒平瓦である。平瓦292~294・296・297は正方形に近い形になり、叩き等の文様は削り取られている。凹面狭端部の面取りはやや大きい。

301は中国製の黒釉四耳壺で、いわゆるルソン壺の類である。堅緻な灰白色の胎土を持ち、艶のある黒釉が薄くかかる。やや内面に凹凸外底を除いて、釉はすべてにかけられている。口縁部を欠くが、玉縁状の口縁上端部の釉が削り取られているタイプで、露胎の外底には重ね焼きの痕跡が円形に残っている。口縁上端部の釉を削り取ること、又、外底に残る円形の重ね焼きの痕跡の径が口縁径と一致することなどから、大形の壺でありながら口縁上に底部を載せる直接の重ね焼きによって焼成されていると考えられる。

SX 1001 (302~353)

菩提川の旧河道と考えられる自然流路である。C区の兵火以前の遺構の大部分を切っているが出土遺物には近世のものがまったく見られず、兵火直後の時期の短期間の河道と思われる。出土する遺物はきわめて多量で、青磁・白磁・染付・鉄釉系陶器、美濃瀬戸系陶器、備前焼、土師質瓦質土器、土師質皿、瓦などである。

303~308は青磁である。青磁には椀、皿、稜花皿、盤、香炉などがある。白磁、染付に比すと少量である。

303は端反りの椀である。火中して文様が不鮮明であるが、内面体部には型押しによる浮文があり浮文には体部を何分割かするような2本の縦線が見られる。暗灰白の粗い胎土を持つ。304は蓮弁文の椀である。外面体部の巾広の蓮弁文は片切彫りによるものであるが蓮弁部の盛り上りを欠いている。又、内面にも片切彫りの文様が見られる。釉は畳付を越えて一部外底に及んでいる。底部中央部を欠くが、外底にまわった釉は削り取らない。灰白色の堅緻な胎土に暗緑色の釉が厚くかかる。305は線描蓮弁文の椀である。山形の剣頭は蓮弁の単位を比較的良く意識して付されて

いる。内面見込にもやはりへら先による花文が見られる。堅緻な灰白色の胎土に草緑色の釉が薄くかかる。

306は皿である。内面体部に丸彫りによる蓮弁文が見られる。灰白色の胎土はやや粗く、深い草緑色の釉が薄くかかる。釉は畳付を越えて一部外底にまわる。外底での釉の削り取りはなく、陶枕跡らしいものを残している。

307は小形の香炉である。算木などの文様は見られず、無文である。内面体部途中から見込にかけて無釉で、露胎部は赤褐色の発色をする。釉は厚く暗緑色を呈する。

308は腰折れの器形を有する稜花の盤である。内面には魚鱗状の、外面には蓮弁状のへら描きによる文様が見られる。灰白色で堅緻な胎土に草緑色の釉が厚くかかる。

309～315は白磁である。この遺構出土の中国陶磁では量も多量である。端反りの皿が主体であるが菊皿や瓶なども少量見られる。

309は瓶で、おそらく玉壺春のような器形のものである。高台は断面四角形で低い。胎土はやや粗く、かすかに黄味を帯び、釉は乳白色で光沢があり、全体に細かい貫入が見られる。釉は畳付から外底に及ぶが、これを荒く拭き取っている。内面は無釉である。

310は罍皿のような器形の小形の皿で、薄く精良な造りである。胎土はわずかに灰味があり、釉には青白磁風の青味がある。

311・312は最も多量に出土する小形の端反りの皿である。灰味の強い胎土に光沢のない釉がかかり、釉には灰色の小さい斑点が無数に浮いている。312の釉がけは体部と外底を一動作では、行なわず、外底の釉は高台内面で止まり、畳付に及ばないように意識される。畳付での釉の削りとは端部を尖らすように斜めに外側から面取りし、更に畳付を水平に削っている。外底には擦痕による「◇」のマークが付されている。所有者(坊)を示すものと思われる。313～315は大形の端反りの皿である。純白に近い胎土と釉を持ち、釉には光沢がある。施釉の手順は312と同様であるが、畳付での釉の削り取りは内外両面から端部を尖らすように面取りし、更にこの端部と高台内面をあわせてナデで端部を少し丸くしている。ただし、このタイプのものにも312同様の処理を行なうものも存在するようである(19・190)。

316～323は染付である。染付には椀、皿、呉須手の鉢などがある。椀には蓮子椀や霞頭心型の底部を持つものがあり、皿には萼筒底のもの、口縁の端反りのもの、内彎するもの、罍皿などがある。316～319は萼筒底の皿である。316は内面見込と外面体部に草花文と思われる文様の描かれるものである。畳付の釉の削り取りは椀で一部の釉が残ったままである。317～319は内面見込に花鳥文の見られるものである。317は外面体部に蕉葉文帯と波濤文帯が巡る。呉須の発色は良好である。318・319の外面は無文で、葉に灰白色の胎土で釉も黒味のある発色を示している。320は外面体部に牡丹唐草文、内面見込に羯摩文の見られる端反り皿である。

321は蓮子椀型の底部を持つ椀である。内面見込には牡丹文が見られる。外面体部には牡丹唐草文が描かれるものである。端反りの皿や端反りの鉢とのセット関係が知られている。

322は大形の罌皿である。外面の口縁付近に列点文が二重に巡り、体部には草花文が見られる。呉須の発色が悪く黒味が強い。

323は体部が二重に作られた椀である。口縁を折り返した椀の外に、わずかに径の大きい椀をはめ込み、これを釉着させたものである。外面体部には花鳥文が描かれ、内面には雲堂文のような文様が見られる。根来寺において初見の器形である。

324～334は美濃瀬戸系の陶器である。中国陶磁などと比してさほど多量ではないが、天目茶碗灰釉おろし皿、灰釉皿、三足盤、灰釉瓶、褐釉瓶などが見られる。

324～327は天目茶碗である。324は胎土のような光沢のある透明度の高い釉のかかるものである。胎土はやや赤味のある黄白色で軟質である。露胎部には赤茶褐色の化粧掛けが見られ、高台はいわゆるしいたけ高台である。漆による補修痕が見られる。325は黒釉天目茶碗で、火中している。胎土は灰褐色で露胎部への化粧掛けは行なわれない。326・327は褐釉の天目茶碗で、共に明るい茶褐色である。胎土は黄白色でやや軟質である。新面には茶褐色の釉下に黒色のガラス質の釉が見られる。327は火中する。

328・329は灰釉おろし皿である。共に内外面口縁部付近にのみ黄緑色の釉がかかり、体部は露胎である。328のおろし目は巾が狭く、鋭いヘラ先などによるような感じで、329のものはやや巾広であり、鋭どさに欠ける。

330～333は灰釉皿である。330は軟質で粗い黄白色の胎土に淡黄緑色の透明な釉が薄くかかる。畳付と外底の釉は雑にふき取っている。331は暗灰色の堅緻な胎土を持ち、釉は灰緑色を呈する。あるいは銅緑釉かと思われるものである。外底に輪陶枕痕を残す。332・333は同一個体の可能性が強く、共に火中している。畳付と外底の釉を雑にふき取り、外底中央部に輪陶枕痕を残す。内面見込にかたばみの印花文が見られる。

334は褐釉の瓶の底部である。胎土は粗く黄白色でやや軟質である。体部には巻き上げ痕を残し、外底には回転系切痕が見られる。外面体部下位から底部は露胎で、外面及び内面に黒褐色の釉がかかる。

335～353は備前焼である。壺、罌、招鉢、水屋罌、鉢、徳利などがある。

335は肩部に擲掃の波状文を持つ壺である。胎土は中心部が暗赤褐色で外側が灰褐色のサンドイッチ状で堅緻である。表面は暗赤褐色を呈す。口縁の外側に粘土を貼り付けて端部を尖らせている。余り見かけない形状である。336～341の壺には大形のものと小形のものがある。336は小さい、わずかに折り返した玉縁状の口縁と、よく張った肩部とを持つ大形の壺である。赤褐色の堅緻な胎土で、口縁部や肩部に灰緑色の自然釉がかかる。マンガン粒などを多く含んだ灰白色の胎

土と張りのない撫で肩の器形を持つ壺である。整形や調整は雑で、焼成も不良で表面は暗灰褐色を呈す。肩部での粘土の貼り合わせ痕を明瞭に残している。338は折り返しの玉鉢状の口縁を持つ大形の壺である。胎土には砂粒を多く含み、中心部が暗灰色、外側が赤褐色のサンドイッチ状を呈す。内外表面は暗赤褐色で、外面頸部に胡麻状の自然釉がかかる。339は小形の双耳壺である。暗赤褐色の堅く密な胎土で、焼成は良好である。口縁部の横ナデや内面体部のナデも丁寧である。又、双耳と思われる横耳も非常に丁寧に送られている。口縁上部及び肩部には胡麻状の自然釉がかかっている。340は大形の壺である。口縁端部を外方につまみ出しているが折り返しは行なわれていない。胎土は中心が暗灰色、外側が灰白色で粗く堅い。表面は灰褐色で灰緑色の胡麻状の自然釉がかかる。341は折り返した扁平な玉鉢状の口縁を持つ大形の壺である。暗赤褐色のやや粗い胎土で、表面も同様の発色である。口縁内面と肩部とに胡麻状の自然釉が見られる。

342・343は水屋甕である。342は完全に無頸化し、又、小形化している。同様のタイプの水屋甕では双耳はきわめて簡略化され、双耳下の沈線はへら先等による不明瞭なものになることが知られている。暗灰色のやや粗い胎土を持ち、表面は灰黒色を呈す。343は双耳には縄目の表現がされ、双耳下に三角凸帯が巡る段階のものである。やや粗い暗灰色の胎土で表面は暗灰褐色である。厚い器内で、器形も非常に大形である。

344は片口の鉢である。内面体部に櫛描の波状の摺目を持ち、余り見かけないものである。通例のこのタイプの鉢に比してやや小形である。底部及び体部下半はへら削りのままで、体部上半から口縁を経て内面体部上半は横ナデで調整される。灰白色の胎土で、表面は赤褐色を呈す。外面口縁直下に直接の重ね焼の痕跡を残している。345は鉄鉢形の鉢である。平底ではなく丸底のタイプのもと思われる。暗灰白色ないし暗赤褐色の堅緻な胎土で、表面は暗灰色、内面は赤褐色である。表面はかなり広い範囲に灰緑色の薄い自然釉がかかる。外面体部下半から底部にかけてはへら削りのままで、体部上半から内面のおそらく中心部まで横ナデで調整されるものである。

346は水指と思われるものである。やや副張りの器形で口縁端部は蓋受けが付いている。内外面とも横ナデで調整するが、口縁端部の蓋受けは先端の丸いへらなどによって凹線状にしたものである。胎土は内側半分が暗赤褐色、外側半分が灰白色で、内外表面は赤褐色を呈する。

347は肩の張った器形の小形の甌もしくは徳利である。薄い造りの胎土は赤味がかかった灰白色で、表面は黒いマンガング粒などの斑点の浮んだ灰褐色である。肩部には淡緑色の自然釉がかかっている。体部と頸部の結合の痕を明瞭に残している。

348・349はラッキョウ徳利と思われるものである。頸部の内面には轆轤によるしぼりの痕跡が見られる。共に暗灰色の胎土で、表面は暗灰褐色を呈する。

350～353は摺鉢である。すべて口縁が広く上方に拡張し、口縁外面が凹線によって波状になる。天正の兵火に近い時期のものであるが内面の摺目は格子状にはならず一定の間隔を持って付され

ている。

380は大甕である。この遺構から出土する大甕は口縁外面に波状の段の付く天正の兵火直前の二石入や三石入のものが大部分であるが、完全な玉縁を持ち還元焙で焼成された小形の甕や、380のように口縁はかなり扁平になりながらもかろうじて玉縁の名残を持ち、撫で肩の器形のものも少量出土している。

P 1006 (354~359)

S B 1003に属する柱穴である。この掘立柱の柱穴は底い扁平な河原石を礎板として置き、これを囲むように円形に十数個の土師質皿（354~359）が出土した。すべて同一タイプのもので、SG 02などで出土したよく水滲した乳白色の胎土を持つ土師質皿との共伴例が知られるものである。器径はすべて7.5センチ前後で、胎土、調整はヘソ皿同様で、わづかにヘソ状の表現をしたものも混在している。なお、SD 106において、これらと同一の技法を持ちながら先述 SG 02の乳白色の胎土のものも知られ、これは完全にヘソ皿の器形を有している。

付表1 出土銭貨一覧表

拓影No	出土層位・遺構	銭貨名	初 鋳 年 代
381	A-表土	寛永通宝	日本・寛永年間(1624~1643)
382	A-1	開元通宝	唐・武徳4年(621)
383	A-1	淳化元宝	北宋・淳化元年(990)
384	A-1	天禧通宝	北宋・天禧年間(1017~1021)
385	A-2	祥符通宝	北宋・大中祥符元年(1008)
386	A-2	洪武通宝	明・洪武元年(1368)
387	A-S G 02	紹熙元宝	南宋・紹熙元年(1190)
388	C-S E 01	淳化元宝	
389	C-S E 01	祥符元宝	
390	C-S E 01	皇宋元(通)宝	北宋・宝元2年(1039)
391	C-S E 01	熙寧元宝	北宋・熙寧元年(1068)
392	C-S X 1001	開元通宝	
393	C-S X 1001	天禧通宝	
394	C-S X 1001	皇宋通宝	
395	C-S X 1001	至和元宝	北宋・至和元年(1054)
396	C-S X 1001	元豊通宝	北宋・元豊元年(1078)
397	C-S X 1001	洪武通宝	
398	C-S X 1001	永樂通宝	明・永樂6年(1408)
399	C-S D 1003	皇宋元宝	

付表2 出土陶磁器組成表

1. NG81・出土陶磁器総破片数(近世のものを除く)

国	品名	数量	備前	備前	数量	備前	数量	備前	数量			
										備前	数量	備前
中 国	青磁	椀	109	黒(褐)釉	四耳壺	149	国 産	備前	徳利	222		
		皿	14	天目	椀	1		鉢	18			
		盤	12	赤絵	皿	3		その他	10			
		香炉	8	青白磁	梅瓶	15		計	2,458			
		鉢	1	その他		5		信楽	壺	20		
	鉢托	16	中国計		1,785	丹波		壺	4			
	坏	1	朝鮮	青磁	瓶	1		常滑	甕	42		
	その他	1		ソバ茶椀	3	不明やきしめ			10			
	計	177	輸入計		1,789	国産陶計			2,672			
	白磁	椀	4	国 産	美濃	天目茶椀		54	土師	火鉢	鉢	280
		皿	895		瀬戸	灰軸椀		8	瓦	火鉢	舎鉢	35
		坏	18			"		皿	39	こ	ね鉢	113
瓶		2			"	盤	6		鍋	58		
その他		7			"	瓶	10		椀	32		
計	926				おろし皿	4		その他	17			
染付	椀	68	計			19		計		535		
	皿	406	備前		壺	773	土師	皿		9,128		
	盤	25			甕	1,395	瓦	器	椀	20		
	坏	3			スリ鉢	20		皿		10		
	その他	7			水屋甕	20	国産計			14,825		
計	509						総計			16,614		

2. 総破片数に対する器種別の組成比(%)

国	品名	組成比(%)	備前	備前	組成比(%)			
						備前	組成比(%)	
中 国	青磁	椀	0.66	国 産	8.40			
		皿	0.08		スリ鉢	0.12		
		盤	0.07		水徳	0.12		
		鉢	0.10		徳利	1.34		
		香炉	0.05		鉢	0.11		
	白磁	椀	0.02		信楽	壺	0.12	
		皿	5.39		丹波	壺	0.02	
		坏	0.11		常滑	甕	0.25	
	染付	椀	0.41		土師	火鉢	1.69	
		皿	2.44		瓦	火鉢	0.21	
	朝鮮	黒釉四耳壺			0.90	こ	舎鉢	0.68
					0.006		椀	0.19
天目茶碗			0.006		鍋	0.35		
赤絵		皿	0.17	土師	皿	54.95		
青白磁		梅瓶	0.09	瓦	器	椀	0.12	
国	青磁	瓶	0.006		皿	0.06		
		ソバ茶椀	0.17					
	美濃	天目茶碗	0.33					
	瀬戸	灰軸皿	0.23					
		"	瓶	0.06				
備前	壺	4.65						

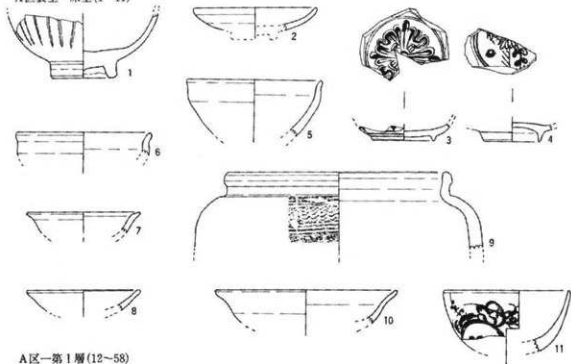
3. 同一種類内での器種別組成比(%)

国	品名	組成比(%)	
			組成比(%)
中 国	青磁	椀	61.58
		皿	7.91
		瓶	0.56
		盤	6.78
		香炉	4.52
	白磁	坏	0.56
		鉢	9.04
		托	0.56
		その他	8.47
		椀	0.43
		皿	96.65
		坏	1.94
染付	瓶	4.91	
	その他	0.76	
	椀	13.36	
	皿	79.76	
	盤	4.91	
坏	0.59		
その他	1.38		

4. 供膳形態の器種内に占める各々の組成比（％）

	青磁	白磁	染付	美濃・瀬戸	計	青磁	白磁	染付	美濃・瀬戸
椀	109	4	68	5(天目)	243	44.86	1.65	27.98	2.06
				8					3.29
皿	14	913	406	39	1,372	1.02	66.55	29.59	2.94
盤(鉢)	28	0	25	6	59	47.46	0	42.37	10.17
計	151	917	499	107	1,674				
椀	72.19	0.44	13.63	4.67	36.45	9.27	99.57	81.36	7.48
皿	9.27	99.57	81.36	36.45					
盤	18.54	0	5.01	5.61					

A区表土·床土(1~11)



A区—第1層(12~58)

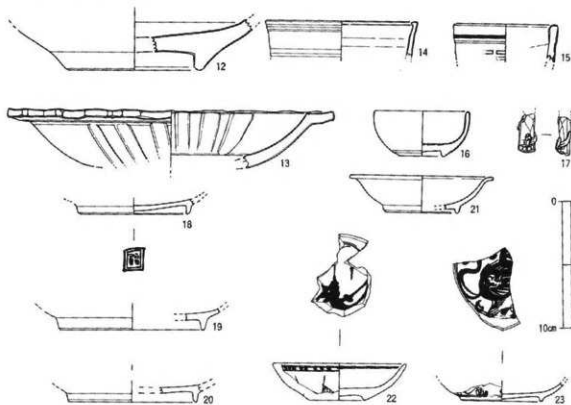


图 8

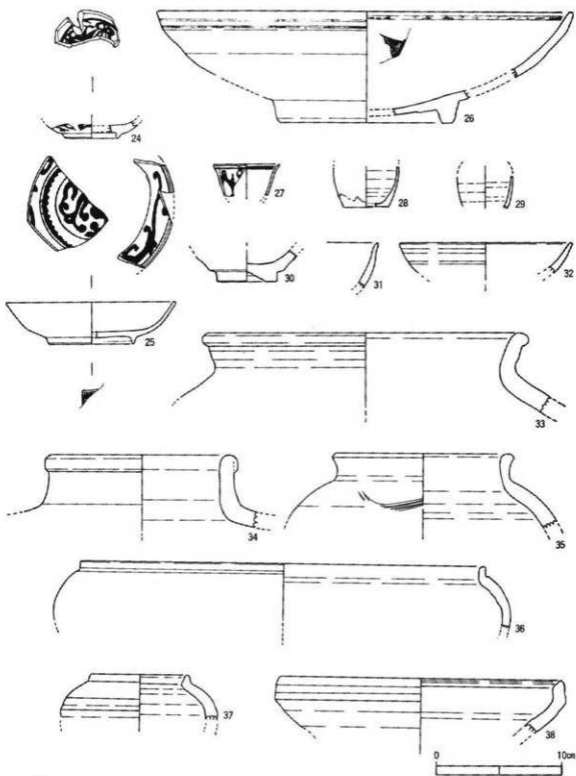


图 9

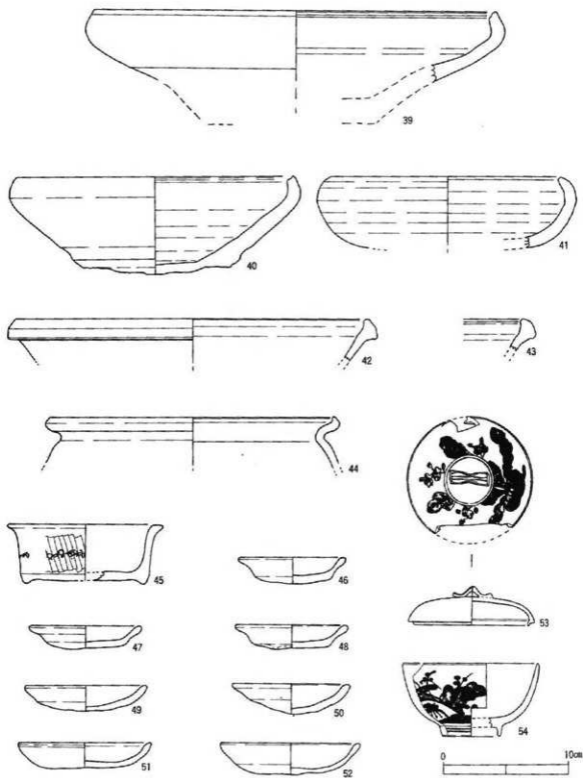


图10

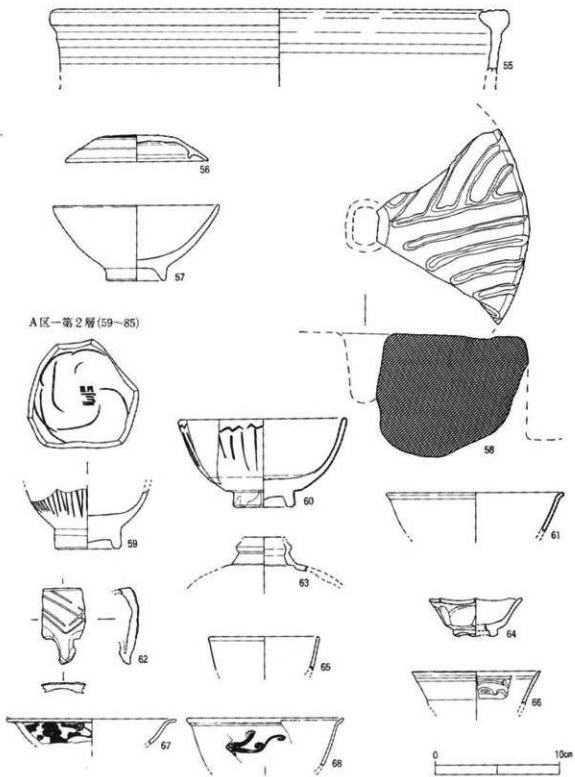


图11

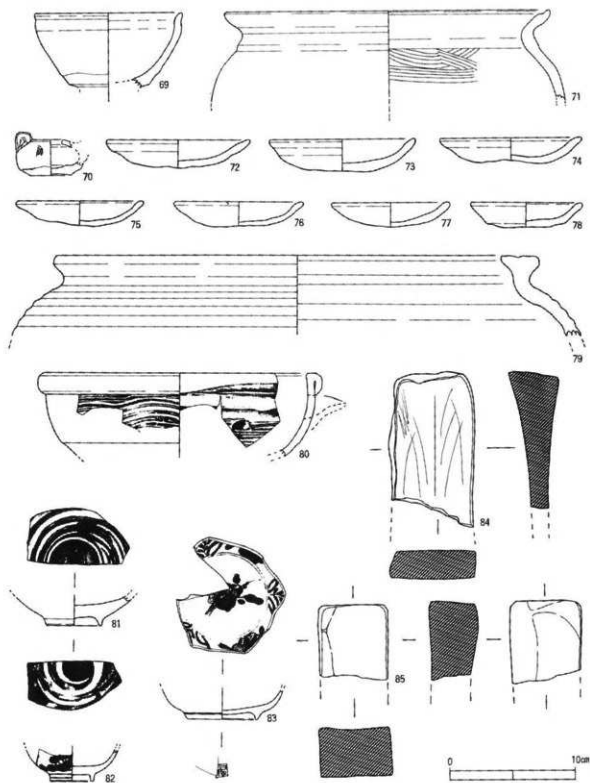
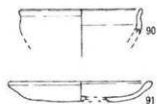
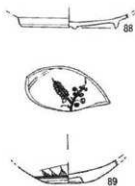
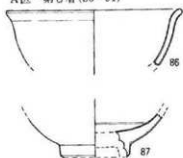


图12

A区—第3层(86-91)



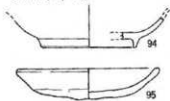
A区—第4层(92)



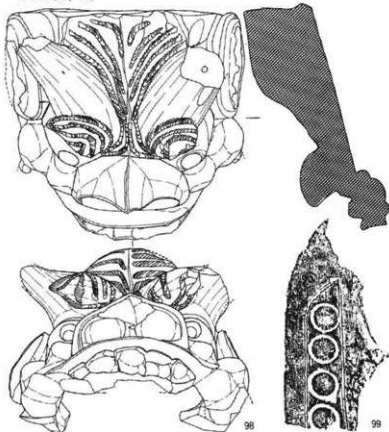
S K 04(93)



S K 09(94, 95)



S K 17(98, 99)



S K 14(96, 97)

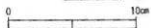


图13

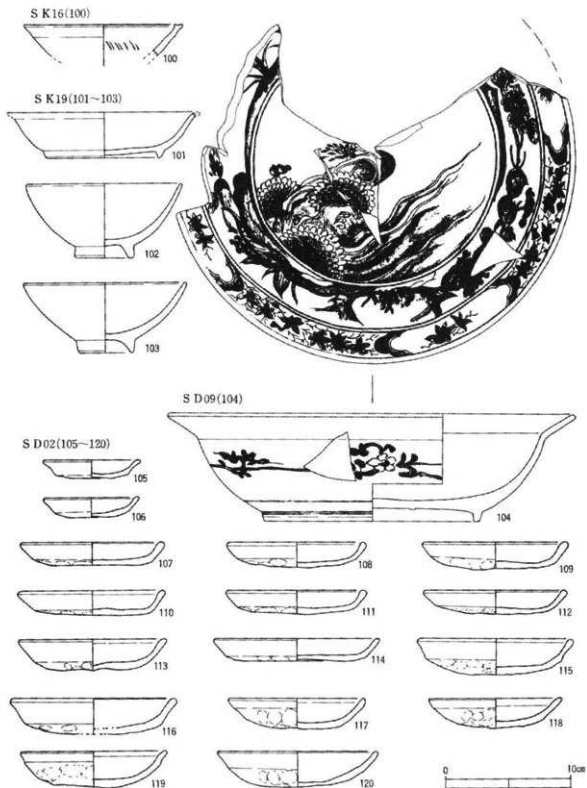
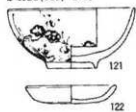


图14

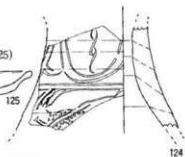
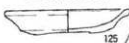
S K 22(121, 122)



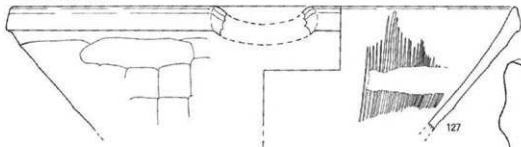
S K 30(123)



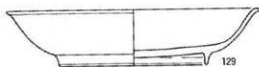
S D 10(124, 125)



S D 11(126, 127)



S G 02(128~154)



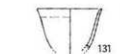
128



130



132



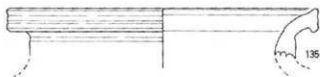
131



134



133



135



150



151

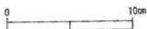


圖15

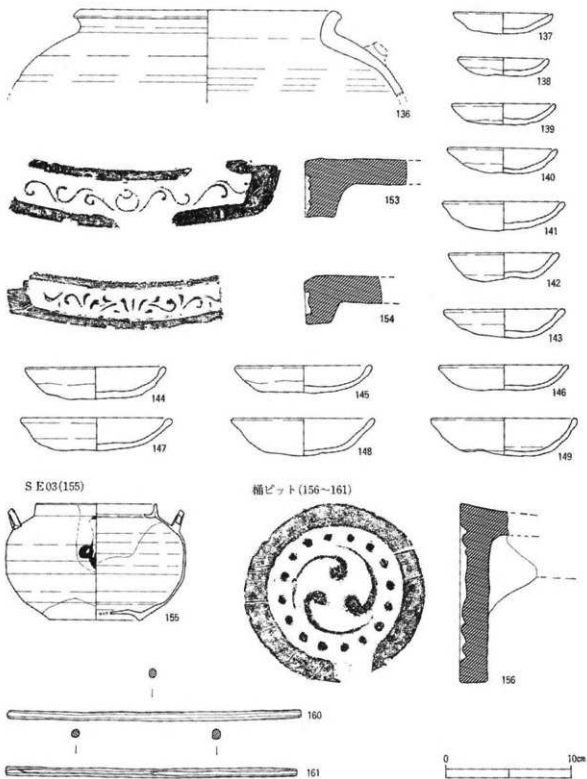
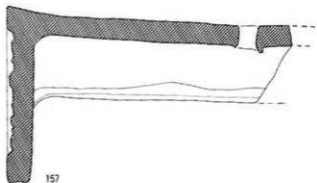
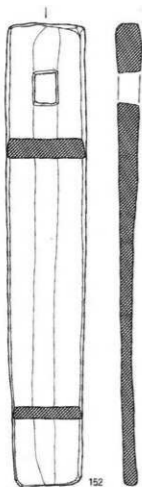


図16



157



152

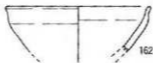


158

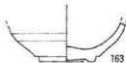


159

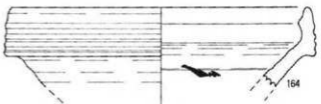
C区—表土・床土 (162~164)



162



163



164

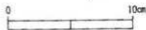


图17

C区—第1层(165~187)

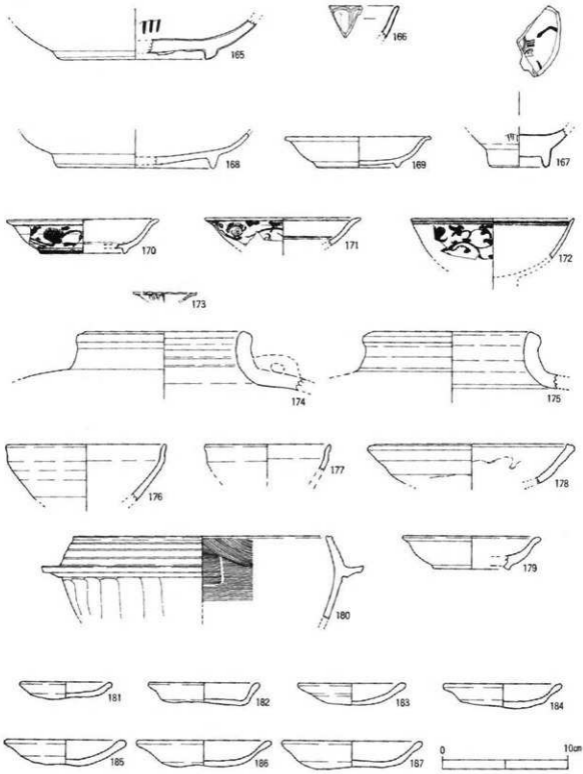
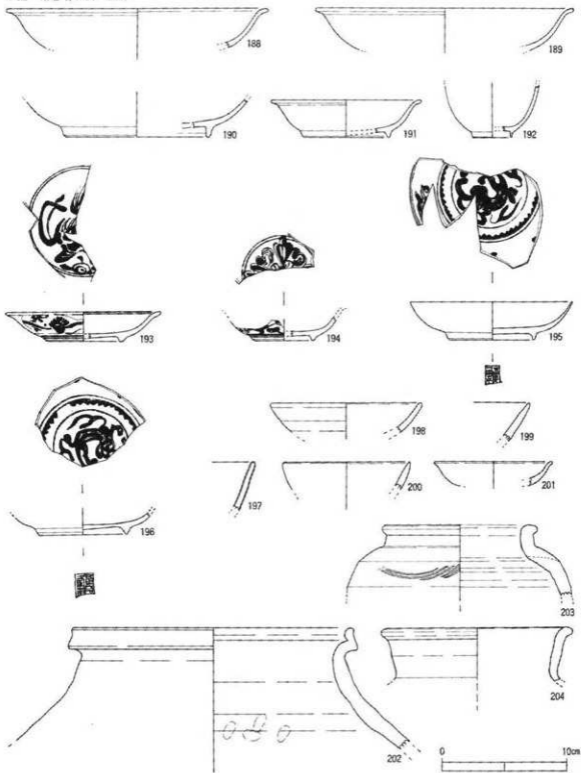


图18

C区—第2层(188~222)



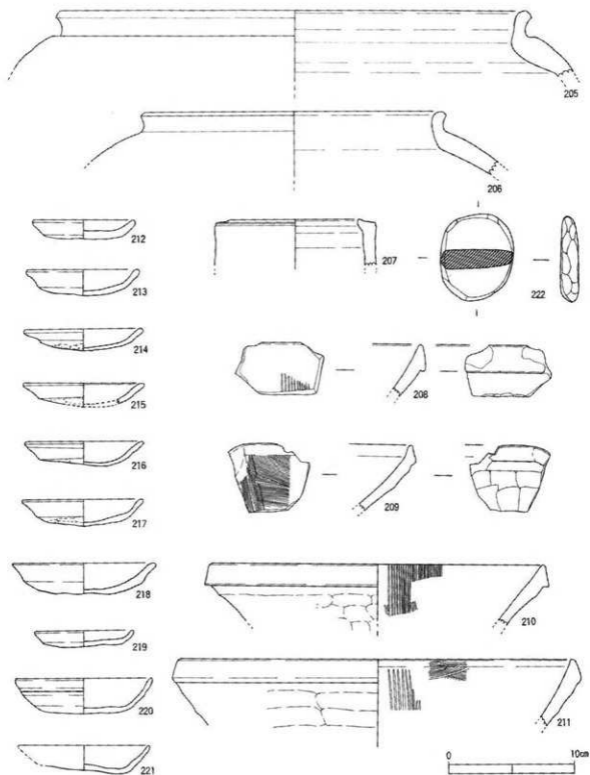
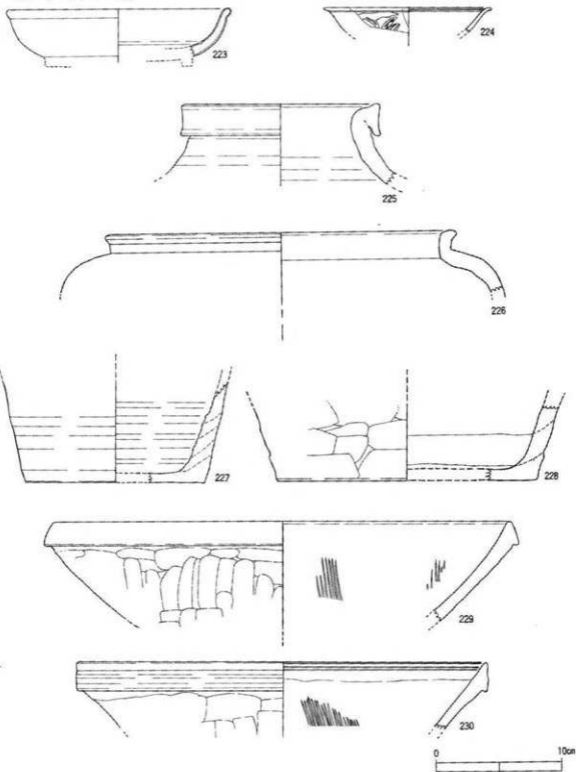
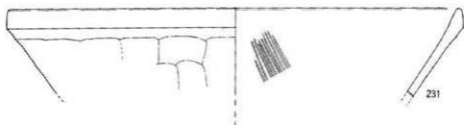


图20

C区—第3層(223~237)





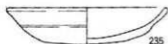
231



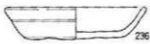
233

232

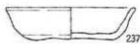
234



235

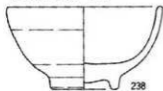


236



237

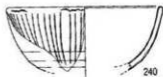
S K 1001 (238~254)



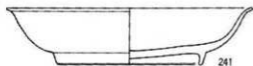
238



239



240



241



242



243

10cm



1



1



1

0



244



245

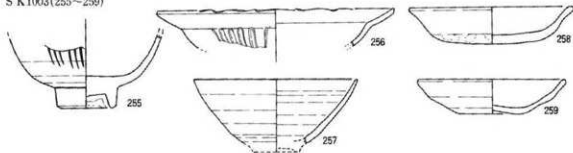


246

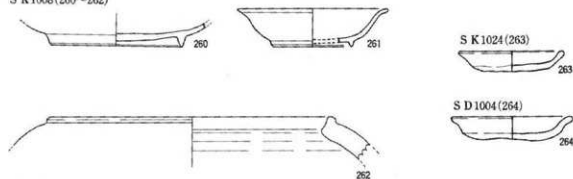
图22



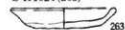
S K 1003 (255~259)



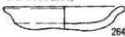
S K 1008 (260~262)



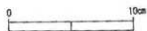
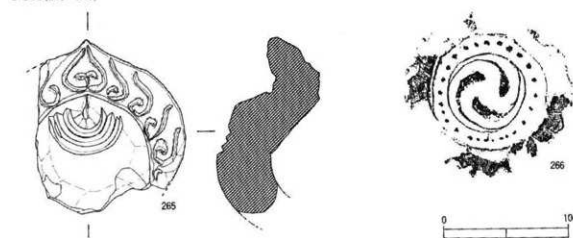
S K 1024 (263)



S D 1004 (264)



S G 01 (265~268)



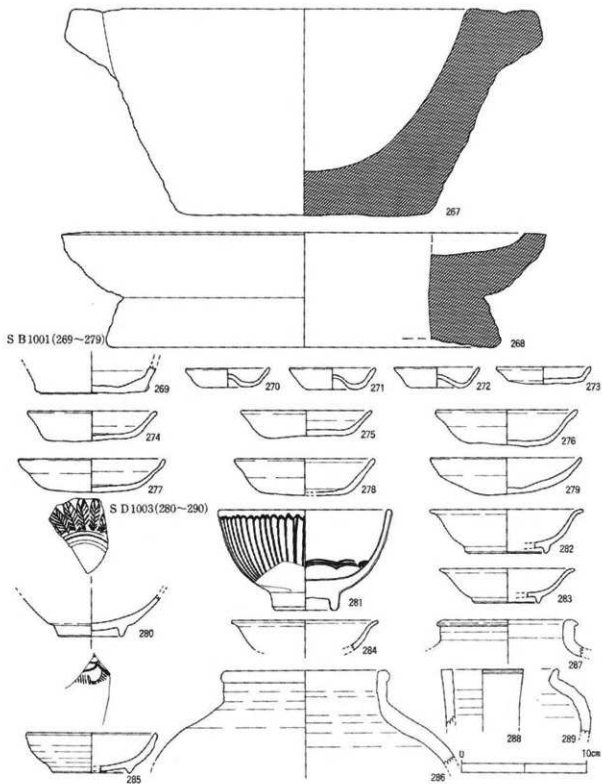


图24

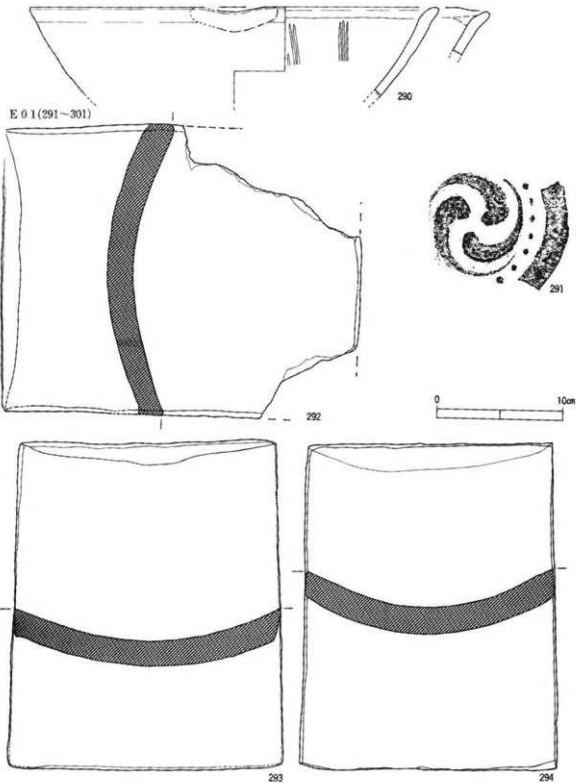
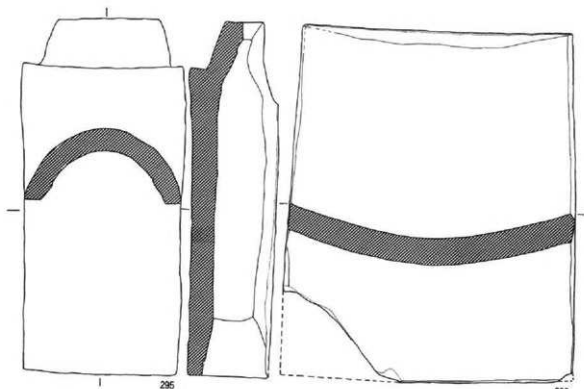
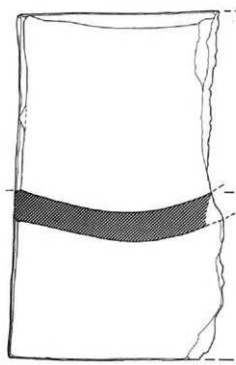
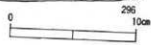


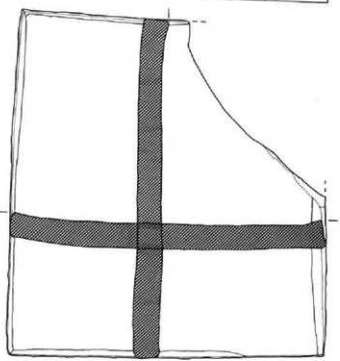
图25



295



296

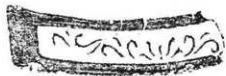
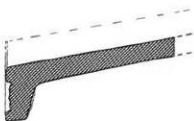


297

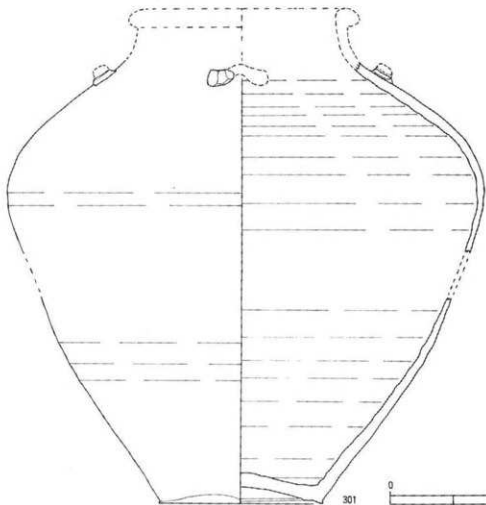
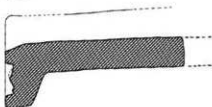
298



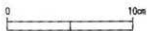
299



300



301



S X 1001 (302~353)

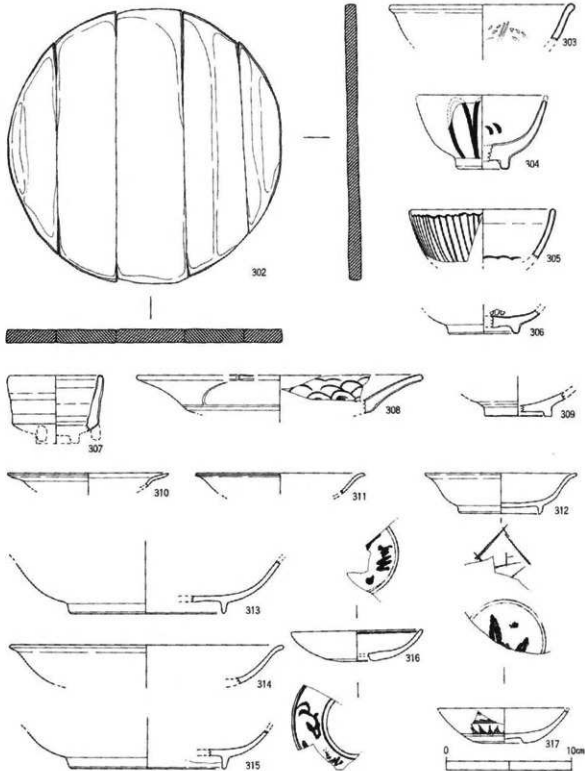
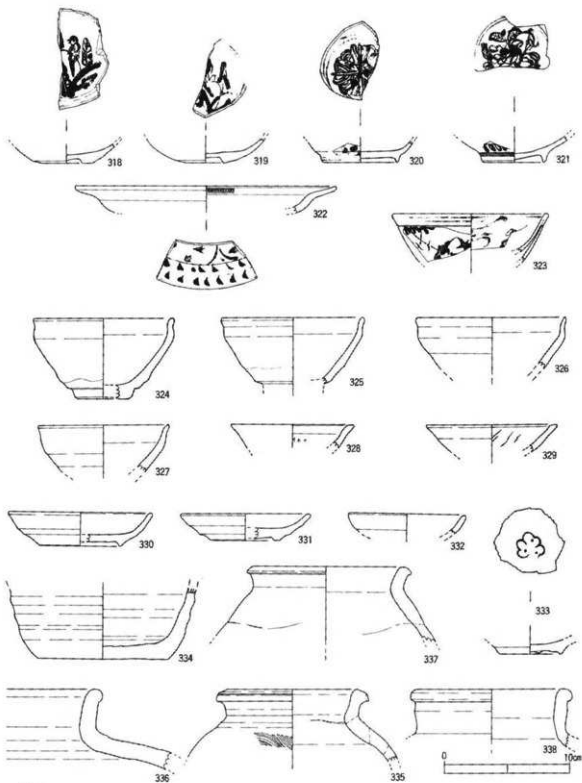


图28



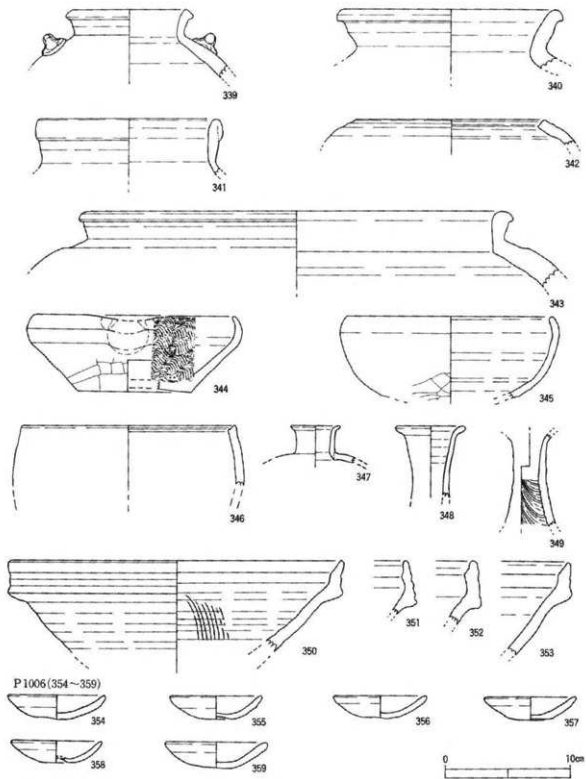
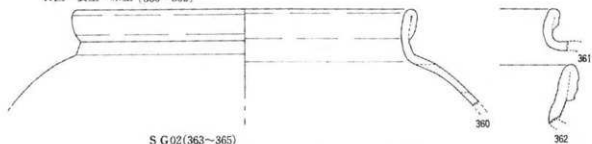
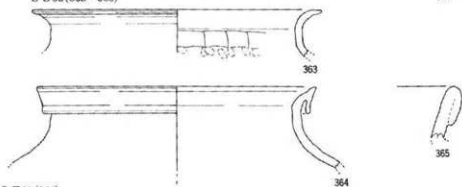


图30

A区—表土·床土 (360~362)



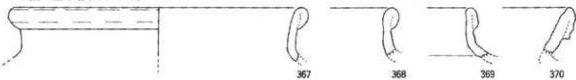
S G 02(363~365)



S F 01(366)



C区—第1層 (367~370)



C区—第2層 (371~376)

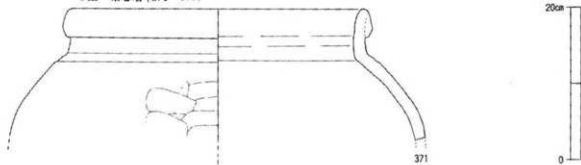


图31

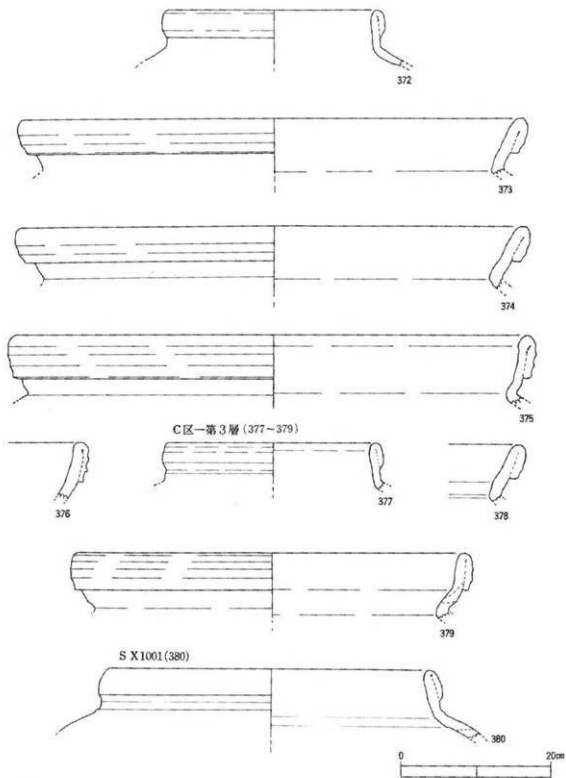


图32

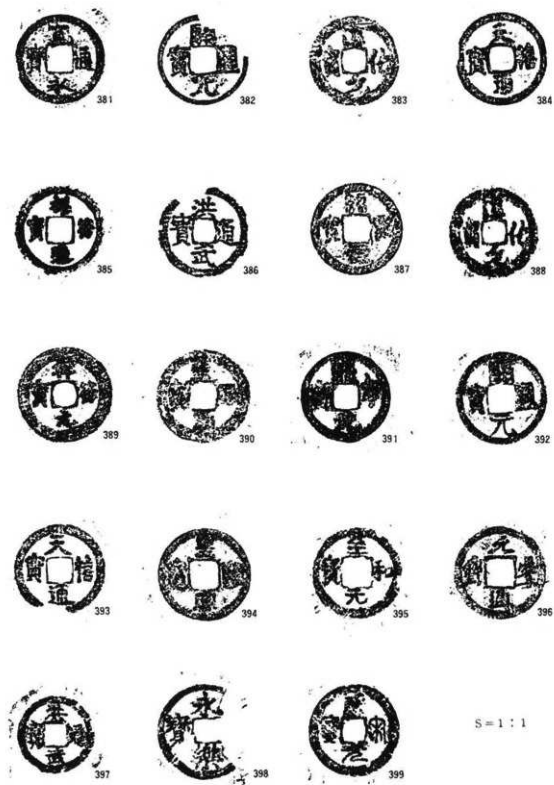
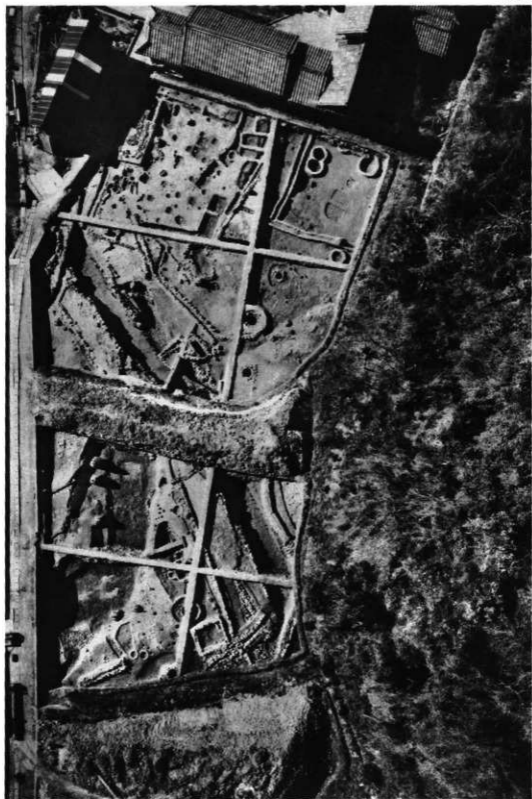
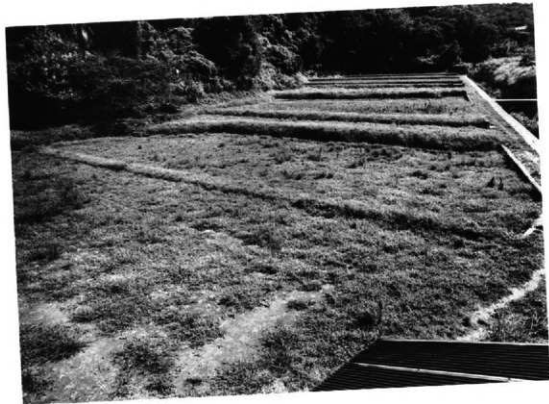


图33 出土钱币拓影



N G 82空撮



1 調査前全景 (西から)



2 A区全景 (南から)



1 A区全景 (東から)



2 A区SD1003



1 A区SD1003 (東から)



2 同上 (西から)



1 A区SD1003 (北から)



2 A区SF01 (北から)



1 AKS B01 (南から)



2 同上 (東から)



1 A区SE03 (南から)



2 A区SE04 (南から)



1 C区全景 (東から)



2 C区全景 (西から)



1 C区SD1003 (東から)



2 同上 (北から)



1 C区SB1002 SX1001 (北から)



2 C区SB1002 (東から)



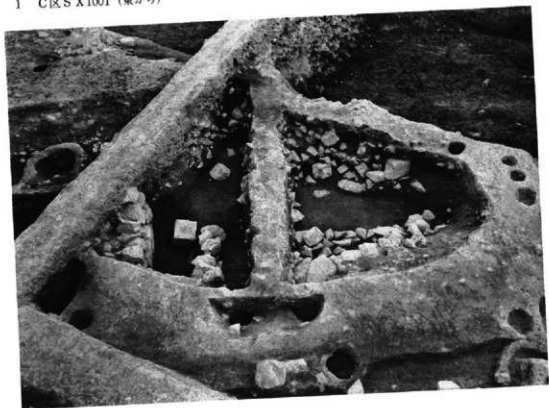
1 C区SX1001 (南から)



2 同上 (東から)



1 C区SX1001 (東から)



2 C区SK1001 (北から)



1 C区SD1005 (北から)



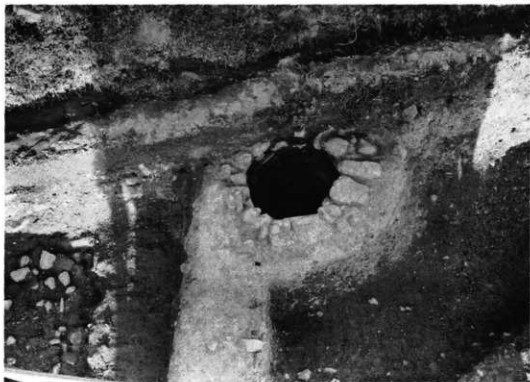
2 C区SD1004 SB1001 (南から)



1 C区SD1004 (南から)



2 同上



1 C区SE01 (西から)



2 C区SK1004 (南から)



1



2

3

4



5

7



6

8



9



10



11



28

29



13

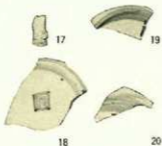
12



16

15

14



17

19

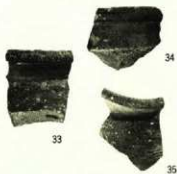
18

20

21



22





39

41



36

38

37



40



45



44



46



47



48



49



50



51



52

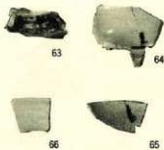


53

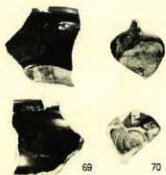


54





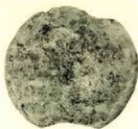
71



72



73



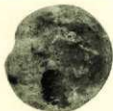
74



75



76



77



78



79



80



81



83

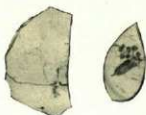
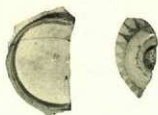
82



84



85



88

89



87

86



90



91



92



93



94



95



96



97



98



99



100



101



102



103



104



105

108

106



107



109



110



111



112



113



120



114



116



115



117



118



120



121



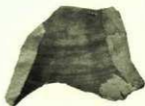
122



123



125



124



126



127



128



129



130

131



132

133



134

135



150

151



136



137



138



139



140



141



142



143



144



145



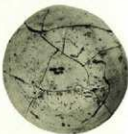
146



147



148



149



153



154



155



156



160



161



152



157



158



159



163

162



164



167

165

166



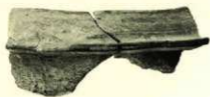
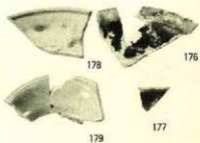
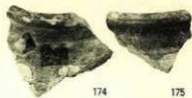
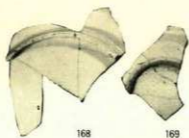
170

172



171

173



180

181

182



183



184



185



186



187



188



189



191

190



192



197



193

194



195

196



198



200



201



199



202



203



204



205



206

207



222



208

209



210

211



212



213



214



215



216



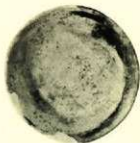
217



218



219



220

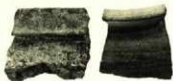


221



223

224



225

226



227

228



229



230



231



232

233



234



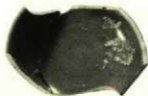
235



236



237



238



240

239



241



242

243



244



245



246



254



255



256



257



260



261



262



263



264



265



266



268



267



269



270



271



272



273



274



275



276



277



278



279



281



282

283



284



280



285



286



287

289



288



290



291



295



292



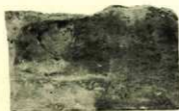
293



294



296



297



298



299



300



301



301



301



302



303

304



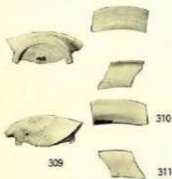
305

306



307

308



310

309

311



312



313



314

315



316

317



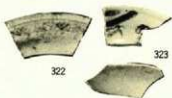
318

319



320

321



322

323



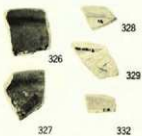
324



325



331



326

328

329

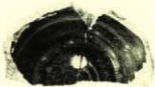
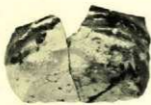
327

332



330

333



334



335

338



337

336



339



340

341



342

343



346

345



344



347

348

349



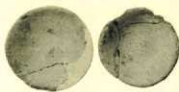
351

352

353



350



354

355



356

357



358

359



361

362

360



363

364

365



367

368

369

370

371



372



377

378

376

373

379



374



375



380



381

昭和56年度
根来寺坊院跡

編集 和歌山県教育委員会
発行 和歌山県教育委員会
印刷 真陽社